

三木市所在

# 年 ノ 神 遺 跡

-山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXVII-

2002年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

三木市所在

# とし の かみ 年 ノ 神 遺 跡

-山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XX-XVII-

2002年3月  
兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、三木市鳥町に所在する年ノ神遺跡、大二遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山陽自動車道建設事業に関連するもので、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、平成5・6年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 出土品整理作業は、平成10年度から平成13年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
4. 遺物写真撮影は、(株)タニグチ・フォトに委託して実施した。
5. 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は池田悦子の補助をえて長濱誠司が行った。
6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
7. 現地調査、整理作業の際には、下記の団体や方々にご教示をいただいた。記して感謝いたします。  
三木市教育委員会・岡山真知子・後藤博彌

## 凡　　例

1. 本書で示す標高値は、東京湾平均海面(T.P.)を基とする。方位は座標北を指し、平面図に示した座標値は、平面直角座標V系原点からの距離である(単位はkm)。
2. 遺物には通し番号をついている。また、石器はS、金属器はMを番号の前に付けて区別している。遺物の番号は、本文・図版・写真図版とともに統一している。
3. 土器の断面は、須恵器を黒塗りとした。
4. 土層などの色調については、小山田正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992年版を使用した。
5. 本書で使用した地図は以下のとおりである。  
第5図 1/25,000国土地理院発行地形図「三木」1997年
6. 遺構名はアルファベットによる略号と、2桁の数字で表記する。各遺構は地点ごとに01から始める。略号の意味は下記のとおりである。 SD:溝 SK:上坑 SH:竪穴住居  
SB:掘立柱建物跡 SA:柱穴列 P:柱穴・ピット SX:埋設土器  
竪穴式住居跡、掘立柱建物跡などを構成する柱穴については、遺構ごとにP1から始める。

## 本文目次

第1章 調査の経過と体制	（長濱）	1
第1節 調査に至る経緯		
第2節 確認調査の経過と体制		
第3節 全面調査の経過と体制		
第4節 整理作業の経過と体制		
第2章 遺跡をとりまく環境	（長濱）	9
第1節 地理的環境		
第2節 歴史的環境		
第3章 年ノ神遺跡の調査		
第1節 調査の概要	（長濱）	11
第2節 I 地区の遺構	（深江・長濱）	11
第3節 II 地区の遺構	（穩定・平田）	16
第4節 III 地区の遺構	（長濱）	20
第5節 IV 地区の遺構	（長濱）	20
第6節 出土遺物	（深江・森内・長濱）	21
第4章 大二遺跡の調査		
第1節 調査の立地と調査の方法	（森内）	26
第2節 調査の概要	（森内）	26
第3節 遺物出土状況	（森内）	26
第4節 出土遺物	（深江・長濱）	26
第5章 まとめ		
第1節 年ノ神遺跡	（長濱）	29
第2節 大二遺跡	（長濱）	30
第3節 年ノ神遺跡・大二遺跡出土の把手付広片口鉢と兵庫県下の新資料	（深江）	31

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	Ⅲ
第2図 三木・小野インターチェンジに関連する調査箇所	1
第3図 確認調査位置図	3
第4図 全面調査位置図	6
第5図 周辺の遺跡（弥生時代）	10
第6図 II 区調査区断面図	16
第7図 SH04・05竪拡大図	19
第8図 大二遺跡調査区位置図・グリッド柱状図	27

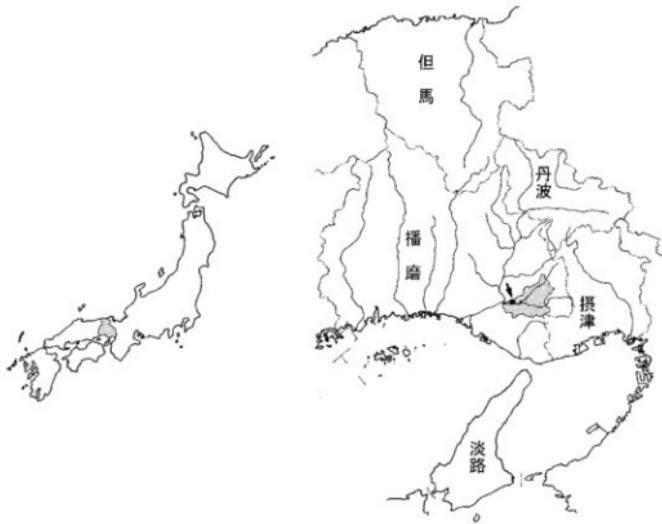
## 図版目次

- 図版1 遺跡 年ノ神遺跡全体図  
図版2 I区 I区南部全体図  
図版3 I区 SH01 SH02  
図版4 I区 SH03 SH04  
図版5 I区 SX01 SK01  
図版6 I区 SK02 SD01  
図版7 I区 SH05 SA01 SA02  
図版8 I区 SX02 SX03  
図版9 I区 SX04 SK03  
図版10 I・II区 I区北半部全体図 II区全体図  
図版11 II区 SH01 SH06  
図版12 II区 SH02・03  
図版13 II区 SH04 SH05  
図版14 II区 SB01 SA01 SA02 SX03  
図版15 II区 SX01 SX02  
図版16 III区 III区全体図 SH01  
図版17 IV区 IV区全体図 テラス状遺構  
図版18 遺物 年ノ神遺跡出土土器(1)  
図版19 遺物 年ノ神遺跡出土土器(2)  
図版20 遺物 年ノ神遺跡出土土器(3)  
図版21 遺物 年ノ神遺跡出土土器(4)  
図版22 遺物 年ノ神遺跡出土土器・鉄器・石器  
図版23 遺物 大二遺跡出土土器(1)  
図版24 遺物 大二遺跡出土土器(2)

## 写真図版目次

- 写真図版1 遠景 遠景(1)、(2)、(3)  
写真図版2 I区 東半部全景(1)、(2) SH01  
写真図版3 I区 SH02 SH03 SH04  
写真図版4 I区 SX01 SK01 SK02 SD01  
写真図版5 I区 西半部全景(1)、(2) SH05  
写真図版6 I区 墓設土器群 SX02 SX03検出状況 SX03 SX04  
写真図版7 II区 全景(1)、(2)、(3)  
写真図版8 II区 SH01 SH02・03 SH06  
写真図版9 II区 SH04 SH05 SH04カマド SH05カマド SH05柱穴内土器出土状況

- 写真図版10 II区 SX01検出状況 SX01 SX02検出状況 SX02 SX03
- 写真図版11 I区・IV区 I区北半部全景(1)、(2) IV区全景(1)、(2)
- 写真図版12 III区・大二遺跡 III区全景 SH01 大二遺跡全景
- 写真図版13 I・III区遺物 出土弥生土器
- 写真図版14 I区遺物 出土弥生土器(2)
- 写真図版15 I区遺物 竪穴住居出土弥生土器 土坑出土弥生土器
- 写真図版16 I区遺物 SD01出土弥生土器 包含層出土弥生土器
- 写真図版17 年ノ神古墳群遺物 年ノ神古墳群出土弥生土器
- 写真図版18 II区遺物 出土弥生土器
- 写真図版19 II区遺物 竪穴住居出土弥生土器 包含層出土弥生土器
- 写真図版20 I・II区遺物 出土須恵器・土師器(1)
- 写真図版21 I・II区遺物 出土須恵器・土師器(2)
- 写真図版22 II区遺物 出土石器 出土鉄器
- 写真図版23 大二遺跡 出土弥生土器
- 写真図版24 大二遺跡 出土弥生土器(2)
- 写真図版25 大二遺跡 出土弥生土器・土師器等



第1図 遺跡の位置

## 第1章 調査にいたる経緯

### 第1節 調査にいたる経過

山陽自動車道（高速自動車道 山陽自動車道吹田山口線）は、大阪府吹田市を起点とし、瀬戸内沿岸の諸都市を結びながら、山口県山口市に至る総延長約434kmの高速道路である。このうち神戸ジャンクション（神戸市北区）～三木・小野インターチェンジ（三木市）間は、第9次施工区間として、昭和57年に整備計画が決定した。その後、昭和59年11月30日に施工命令が出され、昭和60年3月25日に路線發表が行われた。

事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議を重ね、昭和61年4月と昭和62年3月の2回にわたって分布調査を実施した。その結果、52箇所について確認調査の必要が認められた。

この結果を受けて兵庫県教育委員会では平成元年度より確認調査を実施した。

また、本体工事に付帯して三木・小野インターチェンジ付近の丘陵から美嚢川にいたる水路（5号水路）の工事も行われた。この事業対象地についても調査を行った。



第2図 三木・小野インターチェンジに隣接する調査箇所

## 第2節 確認調査の経過

年ノ神遺跡の確認調査は平成2年度、山陽自動車道（神戸～三木）の確認調査の一環として行った。その後、遺跡の範囲が広がる可能性のある箇所について、全面調査と平行してトレーニングによる調査で、範囲の絞り込みを行った。

### 1. 年ノ神遺跡

#### 平成元年度

遺跡調査番号	890092
調査期間	平成2年1月5日～3月31日
調査担当者	岡田章一・山下史朗・高瀬嘉・中村弘・多賀茂治
調査面積	24m <sup>2</sup>

No25地点として調査を行った。2m×2mのグリッドを6箇所設定した。調査の結果、大半のグリッドで遺構・遺物が確認された。遺跡名を年ノ神遺跡と命名し、平成5年度に全面調査を行った。

#### 平成5年度

遺跡調査番号	930117
調査期間	平成5年10月5日～平成6年3月25日
調査担当者	森内秀造・深江英憲・松岡千寿
調査面積	470m <sup>2</sup> （年ノ神古墳群を含む）

全面調査実施の際、北側への遺跡の広がりを確認するため、調査区北側の平坦面にトレーニングを1箇所設定した。調査の結果、ピット状遺構を検出し、弥生土器片が出土した。この結果に基づいて平成6年度に全面調査を行った。

#### 平成6年度

遺跡調査番号	940009
調査期間	平成6年6月6日～6月17日
調査担当者	井守徳男・種定淳介・長濱誠司
調査面積	578m <sup>2</sup>

平成5年度調査の際、遺跡が西側へ広がる可能性が高まった。また谷を挟んだ東側にも遺跡が存在する可能性のある平坦面がつづくため、遺跡の有無と範囲を確認する調査を行った。調査は幅2m、総延長274mのトレーニングを16箇所設定した。調査の結果、大半のトレーニングで弥生時代および古墳時代後期を主体とする遺構・遺物を検出した。この成果に基づき、ただちに全面調査に移行した。

### 2. 大二遺跡

#### 平成元年度

遺跡調査番号	890093
調査期間	平成2年1月5日～3月31日
調査担当者	岡田章一・山下史朗・高瀬嘉・中村弘・多賀茂治
調査面積	20m <sup>2</sup>

- [Solid dark gray square] = 平成元年度
- [Solid medium gray square] = 平成 2 年度
- [Solid light gray square] = 平成 5 年度
- [Solid black square] = 平成 6 年度(直接執行)
- [White square] = 平成 6 年度(受託)



第3図 確認調査位置図

No26地点として調査を行った。2m×2mのグリッドを5箇所設定した。調査の結果、全てのグリッドで弥生土器、須恵器などを多量に包含する黒色包含層が確認された。字名をとって遺跡名を大二遺跡と命名し、平成6年度に全面調査を行った。

### 3. 年ノ神遺跡（5号水路）の調査

#### 平成5年度

遺跡調査番号 930168

調査期間 平成5年11月29日～12月1日

調査担当者 種定淳介

調査面積 84m<sup>2</sup>

年ノ神遺跡などが所在する丘陵裾部から美義川までの間に2m×2mのグリッドを21箇所設定して調査を行った。調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

#### 平成6年度

遺跡調査番号 940103

調査期間 平成6年4月18日～4月19日、5月16日～5月18日

調査担当者 森内秀造・長濱誠司

調査面積 159m<sup>2</sup>

トレンチを6箇所（総延長28m）、2m×2mのグリッドを31箇所設定して調査を行った。鳥町集落北側の平坦面では少量の遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。なお、平成5年度調査区の西側で、住居跡を検出した。この範囲については年ノ神遺跡としてただちに全面調査に移行した。

## 第3節 全面調査の経緯

### 1. 概要

今回の調査対象である年ノ神遺跡は、前記分布調査結果のNo14地点と平成6年度に確認調査を行った範囲である。前節のとおり、平成元・6年度に行った確認調査の結果、弥生時代の住居跡などを検出し、約4500m<sup>2</sup>に及ぶ全面調査が必要と判断された。これらの確認調査の結果をもとに行われた県教育委員会と日本道路公団大阪建設局との協議結果をふまえて、平成5・6年度に全面調査を実施した。

山陽自動車道（神戸～三木）は、平成8年度開通が確定しているため、工事の都合上この区間の発掘調査を平成6年度内にすべて終える必要がある。特に年ノ神・大二遺跡は三木・小野インターチェンジの部分にあたり、調査の遅延は不可能なため、公団側と協議を重ね、詳細なタイムスケジュールで調査に望んだ。

全面調査は、日本道路公団大阪建設局からの依頼（I区東半部：平成5年8月24日付 大建総管第333号、I・II・IV区：平成6年3月31日付 大建総管第150号、大二遺跡：平成6年8月17日付 大建総管第337号）に基づくものである。日本道路公団との契約は、I区東半部は確認調査および年ノ神1～5号墳の全面調査などと一括して「年ノ神古墳群他」で、I・II・IV地区は確認調査および年ノ神6～9号墳の全面調査などと一括して「北山古墳群他」で、大二遺跡は貝谷遺跡の全面調査を含め「貝谷遺跡他」として行った。

調査にあたっては県教育委員会が、発掘調査については、平成5・6年度の年ノ神遺跡、大二遺跡とも株式会社森本紙と、空中写真撮影については年ノ神遺跡が平成5年度は株式会社バスコ、平成6年度は日本工事測量株式会社と委託契約を締結し実施した。大二遺跡の空中写真撮影については日本工事測量株式会社と委託契約を締結して実施した。

また、山陽自動車道の付帯工事として、5号水路の全面調査を公團の直接執行で行った。

調査体制は以下のとおりである。

## 1. 平成5年度

年ノ神遺跡（遺跡調査番号 930117）

所在地 三木市鳥町字年ノ神

調査期間 平成5年10月5日～平成6年3月25日（年ノ神古墳群も含む）

調査面積 1337m<sup>2</sup>

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 池水義輝

副所長 渡邊 清（事務担当）

三木正則（技術担当）

主任調査専門員 大村敬通

総務課 課長 石井 守／主査 津守芳輝

企画調整班 調査専門員 池田正男／主査 植定淳介

調査第2班 調査専門員 西口和彦

調査担当 調査第2班 主査 森内秀造／技術職員 深江英憲 松岡千寿

調査補助員 坂田敏和／現場事務員 五百藏道代

室内作業員 菊島昌子 佐藤朋子 富永浩子 大田八重子

## 2. 平成6年度

年ノ神遺跡（遺跡調査番号 940224）

所在地 三木市鳥町字大二882-56他

調査期間 平成6年7月5日～平成7年1月7日

調査面積 3358m<sup>2</sup>

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 池水義輝

副所長 渡邊 清（事務担当）

三木正則（技術担当）

主任調査専門員 大村敬通

総務課 課長 石井 守／主査 津守芳輝

企画調整班 調査専門員 池田正男／主査 水口富夫



第4図 全面調査位置図

調査担当 調査第2班 潤査専門員 井守徳男  
主査 種定淳介 平田博幸／技術職員 長濱誠司  
調査補助員 進藤眞己子 将積伸一郎 牛谷好伸 中村真也 石松 崇 山下剛史  
現場事務員 大田八重子／室内作業員 五百歳道代

**大二遺跡（遺跡調査番号 940242）**

所在地 三木市鳥町字大二 9-1 他  
調査期間 平成6年11月16日～12月21日  
調査面積 474m<sup>2</sup>

調査担当 調査第2班 主査 森内秀造／技術職員 井本有二 仁尾一人  
調査補助員 中北敦子／現場事務員 佐藤朋子  
室内作業員 菊島昌子 富永浩子 舟坂好子

**年ノ神遺跡（5号水路）（遺跡調査番号 940149）**

調査期間 平成6年5月16日～5月23日  
調査面積 125m<sup>2</sup>

調査担当 調査第2班 主査 種定淳介／技術職員 井本有二 仁尾一人

#### 第4節 整理作業の経緯

遺物の整理にあたっては、発掘調査時に監督員詰所において土器の洗浄、ネーミングを実施することから開始した。本格的な整理作業は平成11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に搬入し、開始した。

##### 1. 平成11年度

年ノ神1～5号墳出土遺物とともに接合・補強を行い、実測すべき遺物をピックアップした。

整理担当職員 整理普及班 主査 森内秀造／技術職員 長濱誠司  
主査 加古千恵子／技術職員 岡本一秀（保存処理担当）  
調査第1班 主査 種定淳介  
調査第3班 技術職員 深江英憲／技術職員 松岡千寿  
復興調査班 主査 平田博幸

整理技術嘱託員 香川フジ子 石野照代 西野淳子 鮎田章子 喜多山好子 宮野正子 又江立子  
岡井とし子 岡田祥子 蓬莱洋子  
栗山美奈 和田寿佐子 前川悦子 藤川紀子（保存処理担当）



第5図 周辺の遺跡（弥生時代）

- 1.年ノ神遺跡 2.大二遺跡 3.鳥町北山散布地 4.貝谷遺跡 5.鳥町遺跡 6.和田田中散布地 7.和田神社遺跡
- 8.正法寺山銅劍出土地 9.正法寺古墳群 10.高木石劍出土地 11.西退田口山遺跡 12.下村遺跡 13.大日山遺跡
- 14.望塚銅鐸出土地 15.宮山古墳群 16.成福寺古墳群 17.西条庵寺下層遺跡 18.西条52号墓 19.八坂3号墓
- A.年ノ神古墳群 B.大年山古墳群・遺跡 C.舞手野古墳群 D.白沢3号窯 E.白沢放山遺跡 F.大龜谷山古墳
- G.奥新田東古墳群

#### 参考文献

- 兵庫県三木市『三木市史』三木市役所 1970年  
 加古川市史編さん専門委員『加古川市史』第一巻 本編Ⅰ 加古川市 1989年  
 兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史考古資料編』 兵庫県 1992年  
 加古川市史編さん専門委員『加古川市史』第四巻 史料編Ⅰ 加古川市 1996年  
 小野市史編纂専門委員会『小野市史』第四巻 史料編Ⅰ 小野市 1997年  
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成8年度 年報』 1997年  
 小野市史編纂専門委員会『小野市史』第一巻 本編Ⅰ 小野市 2001年  
 三木市教育委員会『三木市遺跡分布図』三木市文化研究資料第17集 2001年

## 第3章 年ノ神遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

年ノ神遺跡は、前述したとおり平成5・6年度の2年度にわたって調査を実施した。調査区の地形を観察すると、北側に丘陵を控えた東西に延びる低位段丘上に遺跡は立地する。段丘上の標高は40m前後、現在の水田面との比高差は8m程度である。段丘上は平坦であるが、I区とII区間は、深い沢となっており、底に丘陵を構成する岩盤が露頭している。また、I区とIII区の間も浅い谷が入っている。IV区は北にやや離れて丘陵中腹のやや傾斜が緩やかになる地点に立地する。I区は、年度と地形により、4地区に分けて調査した。平成5年度に調査した東半部、平成6年度に調査した西半部と丘陵への緩斜面に統く北半部である。

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代中期と古墳時代後期を主体とする。また、遺構は検出しなかったものの、奈良・平安時代の遺物が多く出土している。I・III区は近世においては屋敷地として利用されたようで、若干の遺構と陶磁器類の出土をみた。

### 第2節 I区の調査

#### 1. 概要

遺構は東半部に集中し、竪穴住居の他、多数のピット・柱穴、土坑を検出した。これらの遺構の多くは、埋土内から弥生土器片が出土している。その他の時代の遺構は、古墳時代後期の埴輪土器が中央部北縁に3基、中世の土器を含む土坑などが若干ある。また、近世においては屋敷地として利用され、土坑など若干の遺構を検出した。

北半部は2地区に分けて調査した。この地区では、詳細な調査ができなかったものの、工事用道路建設時に土器棺と思われる弥生土器が出土している。調査の結果、遺構の分布は疎らであるものの、土坑などの遺構が検出された。ただし、遺構の時期を決める遺物は出土しなかった。

なお、調査区内の丘陵裾には賽の神の祠があり、周辺に近世以降の陶磁器が散乱していた。またII区との間に露頭する岩は「天の岩戸」と呼ばれ、地元の信仰の対象になっていた。

#### 2. 遺構

##### 竪穴住居

###### SH01 (図版3 写真図版2)

検出状況 I区南半部、中央南側に位置する。西南側へ傾斜する谷状の微地形上での検出で、床面付近まで削平されている。周壁溝付近に垂木材と考えられる炭化材の痕跡がほぼ等間隔に点在し、埋土内に多量の焼土塊が混入しており、焼失住居であることが看取できる。また、少なくとも2度の建て替えが行われたと考えられ、円形から円形、隅丸方形へと形状を変えたと想定する。

規模・形態 最も古いもの (SH01-1) は、平面形が円形を呈し、直径約7.4mである。次 (SH01-2) も円形を呈し、直径約9.0mである。そして、最後 (SH01-3) は隅丸方形を呈し、一辺約4.4mである。3基ともにほぼ周壁溝での検出であり、床面からの深さは殆ど無い。

屋内施設 周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

**周壁溝** 3基共に南西側が削平されるなど、全周しない。床面での幅15~30cm、床面までの深さ5cmである。

**中央土坑** 円形の2基におけるほぼ中央部付近で検出した。平面形が方形状を呈する一辺100cmの土坑内に、直径約75cm円形状の土坑を持つ。

**柱穴** 住居跡の範囲内と想定される柱穴は約50基検出されたが、その内で確実に住居跡に伴う柱穴を抽出するには至らなかった。

**出土遺物** 墓土中において土器が出土したが、磨滅が激しく、図化に耐える資料は無かった。

#### SH02（図版3 写真図版3）

**検出状況** SH01の東側約14mに位置する。遺構は調査区の南端、及び尾根地形の先端にあたり、ここから南側へは急激な崖状地形を呈している。従って、遺構の南半部の掘方は土の流出や後世の削平により失われている。検出した周壁溝及び中央土坑等の状況から、1~2回の建て替えを行ったものと考えられる。

**規模・形態** 検出した周壁溝の状況から、平面形のやや不定な隅丸方形が、それぞれ主軸を異にして3基建てられたことが看取される。最も古いもの（SH02-1）は一辺約5.2mである。次（SH02-2）は最も規模の大きいもので、一辺約7.6mである。最後（SH02-3）は一辺約6.9mである。

**屋内施設** 周壁溝・中央土坑・柱穴・溝を検出した。

**周壁溝** 3基共に南西側が削平されるなど、全周しない。最も残存状況が良好なSH02-1では、床面での幅25~35cm、床面までの深さ5cmである。

**中央土坑** 平面形が円形を呈するもの（土坑A）、隅丸方形を呈するもの（土坑B）を検出した。土坑Aは床面での直径約75cm、床面までの深さ50cmである。土坑Bは一辺70~80cm、床面までの深さ約80cmであり、特に土坑Bは、土坑周辺に平面方形状の浅い土坑を持つ。3基の住居に対して2基の中央土坑だが、何れかの段階で中央土坑を再利用したものと想定した。

**溝** 中央土坑に取りつく浅い溝で、掘方の方向性もあまり明確ではない。排水口の可能性も考えたが、断定するには至らなかった。

**柱穴** 住居跡の範囲内と想定される柱穴は約40基検出されたが、その内で確実に堅穴住居に伴う柱穴を抽出するには至らなかった。ただし、住居跡の状況からみて主柱が4本になることは間違いなかろう。

**出土遺物** 墓土中において土器が出土した。磨滅が激しく、図化に耐える資料が非常少なかったが、弥生土器の壺の底部(2)を図化した。

#### SH03（図版4 写真図版3）

**検出状況** SH02の北側約3mと接続した所に位置する。遺構は調査区内で最も高い部分に立地しており、「コ」字状に伸びる溝（SD01）に切られる。遺構は、当初円形状（多角形と考える）の住居跡内にベッド状遺構を付設したものと考えたが、改めて建て替えと判断した。

**規模・形態** 古いとしたもの（SH03-1）は残存部が少ないが、隅丸方形を呈し、一辺約6.3mである。次（SH03-2）は多角形を呈し、恐らく八角形になると考えられる。2角間の一辺が約3.0mで、対面幅約8.6mである。

**屋内施設** 周壁溝・中央土坑・柱穴を検出したが、SH03-1の中央土坑については、溝により削平されたと考えられる。

**周壁溝** SH03-1は、失われた部分が多いが、おそらく全周する。床面での幅約25cm、床面までの深

さ10~15cmである。SH03-1も検出状況から、おそらく全周すると考えられる。床面での幅15~30cm、床面までの深さ5~15cmである。

**中央土坑** 一部SD01の削平により形状が変わっているが、直径約75cmの不定円形を呈する。床面までの深さ65cmである。位置的にもSH03-2に付設するものと考えられる。また、土坑内の壁面や床面は激しく被熱した痕跡がうかがえる。

**柱穴** 住居跡の範囲内の柱穴は約17基を検出したが、その内で確実に住居跡に伴う柱穴を抽出するには至らなかった。ただし、住居跡の状況から4本柱となると考える。

**出土遺物** 埋土中において土器が出土した。磨滅が激しく、図化にたえる資料が非常に少なかったが、弥生土器の鉢（3・4）を図化した。

#### SH04（図版4 写真図版3）

**検出状況** SH03の北西側約9mに位置する。遺構は南西側の谷状の微地形へ向けて僅かに傾斜し、円礫を多量に含むベース層上での検出は、非常に困難であった。

**規模・形態** 形態は方形状を呈し、一辺約4.4mの比較的小型ものである。

**屋内施設** 周壁溝・柱穴を検出した。

**周壁溝** 遺構の南側は削平等により、実際に殆ど残存しない状況であったが、恐らく全周する。床面での幅約15~22cm、床面までの深さ5~10cmである。

**柱穴** 住居跡の範囲内の柱穴は約10基検出した。4本と考えられる主柱のうち、3基については住居跡に確実に伴うと考えられる。

**出土遺物** 埋土中において土器片が出土した。磨滅が激しく、図化にたえる資料は無かった。

#### SH05（図版7 写真図版5）

**検出状況** 調査区の西端で検出し、西半部は調査区外に続く。SA01と切り合い関係にあり、SA01に本遺構が切られている。遺構のある箇所の地山は、北半部が軟質の岩盤、南半部は礫を多く含む層となっているため、遺構の残存状況は、岩盤を掘った北半部は削平を受けているものの壁面が辛うじて残存しているのに対し、南半部は地山が流失し残存状態は不良である。

**形状・規模** 残存する周壁溝が弧状に巡ることから、円形の住居であったと考える。検出した周壁溝から復原される住居の規模は径8m程度となる。壁高は、最も残存するところで19cmである。

**屋内施設** 周壁溝・柱穴を検出した。柱穴は6基検出したが主柱穴は明らかにできない。P1は検出した位置から中央土坑の可能性がある。約1/2を検出し調査区外に続くため、全容は不明だが、径90cmを測る。検出面からの深さは10cmであるが、残存する床面から推定すると、本来の深さは60cm程度となる。埋土には炭・焼土が混じる。周壁溝は弧状に約6.5m検出した。円形住居としてみた場合、1/4程度しか残存していないが、本来は円形に全周したのであろう。また、周壁溝とは別に床上で検出長1.1mの浅い溝状遺構を検出した。

**出土遺物** 出土した土器は小片が多く、高杯脚部(5)のみ図化した。

## 土坑

調査区中央から東よりに集中する。中央付近で検出した土坑は埋土内に弥生土器片を含むものが多く、弥生時代に属するものであろう。また、調査区内には中・近世に属する井戸や竈と思われる土坑が散在する。

#### SK01 (図版5 写真図版4)

検出状況 SH04の東側約6mに位置する。他の遺構との切り合い関係は無い。

規模・形態 土坑は東西幅約68cm、南北幅約54cmの不定格円形を呈する。掘方から床面までの深さは約12cmである。

出土遺物 床面付近の円碟との集積中に土器片が出土したが、図化には至らなかった。

#### SK02 (図版6 写真図版4)

検出状況 SH04の西側約17mに位置する。I区南半部の東半部調査区の西端で検出したが、他の遺構との切り合い関係は無い。土坑内には、拳大強の碟を囲むように巡らして、石組み状にしている。その碟の一つは激しく被熱している。

規模・形態 土坑は東半部のみの検出だが、直径55~60cmの不定円形を呈すると考えられる。掘り方から床面までの深さは約21cmである。

出土遺物 墓土中から遺物は出土しなかった。

機能・用途 用途については不明である。時期についても遺物の出土がなく不明な点が多いが、近接する遺構（SX02～SX04）との関係を考えてよければ、同遺構の時期に比定できよう。

#### SK03 (図版9)

検出状況 平成6年度調査区の南東隅、土坑が集中する一角に位置する。

形状・規模 浅く長楕円形に掘り下げ、その底部の中軸上に4基のピット状の掘り込みがある。長径2.4m、短径1.2m、検出面からの深さ0.03mを測る。ピット状の掘り込みは、底部中央のものが最も規模が大きく、長径0.9m、短径0.5m、の平面格円形を呈し、深さは0.5mを測る。

出土遺物 周囲の土坑と同様に埋土から弥生土器片が出土している。中でも把手付広片口鉢は注目すべき遺物であろう。

#### 柱穴列

西半部で検出した。いずれも掘立柱建物になる可能性がある。

#### SA01 (図版7)

検出状況 調査区西端で検出した。地山である軟質の岩盤を掘り込んだ柱穴5基で構成される。検出長は6.8mを測り、さらに西側の調査区外に続く可能性がある。柱穴の心々間の距離は約1.8mである。

柱穴 不整円形を呈し、径は0.4~1m、深さは15~30cmである。いずれの柱穴も柱痕あるいは柱の抜き取り痕は確認できなかった。

出土遺物 柱穴の埋土から須恵器細片が出土した。

#### SA02 (図版7)

検出状況 調査区北端の段丘崖に近接する。柱穴4基で構成される。検出長は2.5mを測る。柱穴の心々間の距離は約0.5~0.9mとまちまちである。

柱穴 いずれの柱穴も2段に掘り込んでいる。平面は円形を呈し、径は30cmを測る。削平によるためか深さは15~20cmと浅い。いずれの柱穴も柱痕あるいは柱の抜き取り痕は確認できなかった

出土遺物 遺物は出土していない。

#### 埋設土器

弥生時代中期（SX01）と古墳時代後期（SX02～04）のものを検出した。このうち、後者が群をなす。

SX02～04は6年度調査区北東隅で検出した。東西に並んでいる。他の遺構とは重複しない。

#### SX01 (図版5 写真図版4)

検出状況 SH01の北側約10mに位置する。遺構付近北側は後世の削平により段を有して平坦となり、遺構自体が希薄であるが、遺構はその南側末端部で検出した。遺構自体は口縁の欠損する壺を、土坑内に横倒して埋設した状態であるが、上部（壺の縦半分）は削平により失われている。

規模・形態 土坑は東西幅約86cm、南北幅約60cmの不定格円形を呈する。土坑内には、検出幅約32cm、長さ約31cmの壺が横倒して埋設され、直径3cm程の焼成後穿孔を床面側で検出した。また、残存する土器の頂部から床面までの深さは約21cmである。

出土遺物 埋設された壺(1)を図化したが、それ以外に図化可能なものは出土しなかった。

機能・用途 従前から土坑を伴う土器埋設については、土器棺墓という評価を与える事が多かった。ここで、土器内からの人骨等の出土もなく、棺身と棺蓋といった土器棺通有のセット関係も無い状況での評価は危険だが、近接地区で土器棺が出土していることを考慮して、敢えて土器棺の可能性を考えたい。

#### SX02 (図版8 写真図版6)

3基のうち、西側に位置する。土坑の形状は、東西に主軸をもつ楕円形を呈し、規模は、長径0.75m、短径0.6m、検出面からの深さ0.15mを測る。土坑の中央に土師器壺を立位で置く。壺には蓋がなく、内部は土が充満していた。内部の土を精査したが、遺物などは確認できなかった。

#### SX03 (図版8 写真図版6)

3基の中央に位置する。土坑の形状は、南北に主軸をもつ楕円形を呈し、規模は、長径0.8m、短径0.6m、検出面からの深さ0.2mを測る。土坑の中央に須恵器壺が口縁を南に向けた状態で置いている。須恵器杯蓋を蓋にしている。このため、検出時においては、壺内部に土は流入していなかったが、遺物なども全く存在しなかった。

#### SX04 (図版9 写真図版6)

3基のうち、東側に位置する。土坑の形状は、南北に主軸をもつ楕円形を呈し、規模は、長径0.9m、短径0.75m、検出面からの深さ0.12mを測る。土坑の底部はほぼ水平であり、北により土師器壺が口縁を南に向けた状態で設置している。壺は破損し、下半部のみが残存し、上半の破片が内部に落ち込んでいた。

## 溝

#### SD01 (図版6 写真図版4)

検出状況 I区南半部の調査区南東隅に位置する溝状遺構である。SH02・03を切り、溝の両端共に調査区外の段丘崖にぬける。

規模・形態 尾根の平坦部を中心「コ」字状を呈しており、総延長約35mである。掘方の最大幅4.1m、床面幅3.4m、掘り方から床面までの最大深度約50cmで、断面は逆台形、若しくは皿状を呈する。

付帯施設 遺構の北東側の屈曲部分（断面A-A'）の床面上には、不定格円形状の土坑が対面する形で2箇所検出でき、更に北側の土坑ではピットも検出した。この事から、この部分には構造遺構の可能性を想定した。

出土遺物 出土遺物では、弥生土器の壺の底部<sup>19</sup>、高杯<sup>20</sup>、壺<sup>21</sup>、ヘラガキ文を施した土器片<sup>22</sup>などが出土した。

**機能・用途** 調査当時、方形周溝墓、あるいは方墳という説が出たが、主体部が検出できず、結論には至っていない。出土遺物と造構の切り合い関係から、少なくとも弥生時代以降、中世以前のものである。

### 第3節 II区の調査

#### 1. 概要

調査区は、北側の山塊から南の平野部に向かってのびる小さな尾根のひとつにあたる。その先端部から国道175号線のバイパスが取り付くために尾根が東西に分断されることとなり、調査区はその西側部分にあたる。尾根の斜面はかなり急峻な地形となるが、南向き斜面（尾根先端部分）の中腹に東西長約25m、南北幅約15mの平坦地が形成されており、そこに遺跡が存在している。

この平坦地は、基本的に西から東に傾斜する地形であり、その傾斜を吸収して水平面（水田）を得るために後世の削平が加えられた結果として、そのほぼ中央部で大きな段差が形成され、東側と西側の二区に分割されている。両者の間には、1.5m近い落差がある。

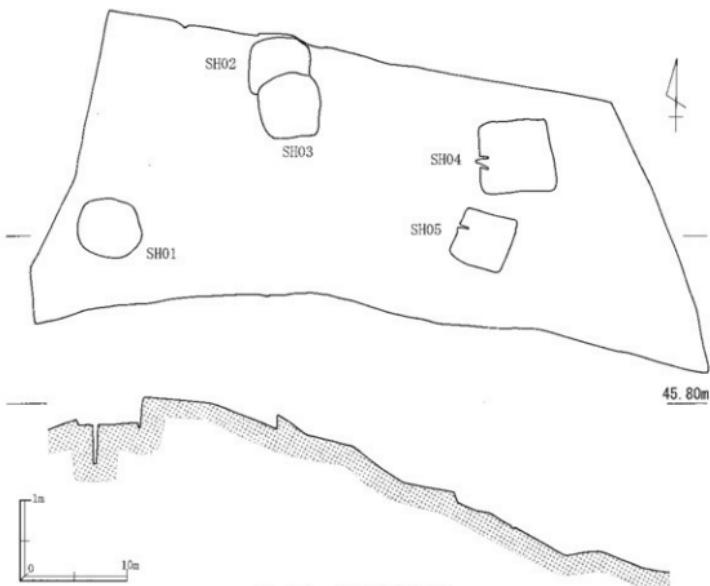
調査区内からは、弥生時代中期後半の遺構と、7世紀の遺構が確認されている。

#### 2. 弥生時代中期後半の遺構

##### 竪穴住居跡

SH01（図版11 写真図版8）

**形状・規模** 調査区の西で検出された住居跡である。一辺は4.0～4.5mの隅丸方形を呈するが、各辺は



第6図 II区調査区断面図

外方にわずかに張り出し、多角形のようにも見える。四柱穴の柱間長は2.4~2.8m、深さは0.45m前後である。中央土坑は不整形な卵形で東西方向に長く、長軸は1.1m、短軸は1.0mである。その西半部は一段浅くなり、中央で深さ0.5mとなる。周壁溝は東側の一部にのみ認められ、幅は0.25m前後である。主軸方位は、N-7°-Eをとる。

#### S<sub>H</sub>02 (図版12 写真図版8)

**形状・規模** 調査区のはば中央北で検出され、SH03と切り合い、その北にあたる住居跡である。残存状況は不良で、北側の周壁の立ち上がりは0.1mに満たない。南辺は切り合うために不明であるが、一辺は5.5~5.6mの隅丸方形を呈する。ただし、北辺は外に張り出し、直線とはならない。柱穴は4個で、柱間長は2.3~2.6m、深さは0.35m前後である。中央土坑は橢円形で東西に長く、長軸は0.9m、短軸は0.65m、深さは0.4mである。土坑の東には、その長軸の延長上に直径0.25m、深さ0.35mの柱穴が存在するが、両者の関連は不明である。残存する周壁に、溝は認められない。なお、床面は西から東へわずかに傾斜している。

#### S<sub>H</sub>03 (図版12 写真図版8)

**形状・規模** 調査区のはば中央北で検出され、SH02と切り合い、その南にあたる住居跡である。残存状況は不良で、南側の周壁の立ち上がりは0.15m前後である。一辺は4.2~5.4mの隅丸方形を呈する。ただし、北辺は外に張り出し、直線とはならず、南北の最大長は6.0m、東西の最大長は5.6mとなる。柱穴は4個で、柱間長は2.4~2.6m、深さは0.4~0.5mである。中央土坑は隅丸長方形で東西に長く、長軸は0.9m、短軸は0.65m、深さは0.5mである。土坑の西は、その長軸の延長上に直径0.4m、深さ0.35mの柱穴が存在するが、両者の関連は不明である。残存する周壁に、溝は認められない。なお、床面は西から東へわずかに傾斜している。

#### S<sub>H</sub>06 (図版11 写真図版8)

**形状・規模** 調査区の南東コーナー部分に検出されたために全体像は確認されていないが、一辺4~5mの隅円方形の平面形を復元できるものと考える。四柱穴のうち北東の1穴が調査区外となるが、各柱の位置は竪穴のコーナー部には描わず、わずかに時計回転方向にずれていることが分かる。中央土坑は北側に直径80cmの円形坑があり、その南側に幅約60cm・長さ約1.6mの長方形土坑が取り付く、所謂「10形態」の形状となる。床面までの深さ約30cmを測る壁部直下には幅約20cm・深さ約15cmの周壁溝が巡らされている。

**埋土** 中央土坑を除く住居跡内は、ほぼ黒褐色のシルト質土～中砂で埋められており、周溝内はにぶい褐色の細砂を埋土としている。

**遺物** 退化傾向にある凹線を伴う土器片が少量出土し、そのうち小型の壺片(33)を図化した。

### 埋設土器

SH05の東に、東西方向にはば一列に並んで弥生時代の埋設土器が3基検出された。

#### S<sub>X</sub>01 (図版15 写真図版10)

SH05の東3.2mに位置し、3基のうち東に埋設された埋設土器である。墓壙は、平面はやや不整形ながら一辺はば0.7mの隅丸方形を呈し、深さは0.3m前後である。底面の西半は平坦である。棺に比べて墓壙は広く構築されている。棺は完形の壺を棺身、高杯脚部を棺蓋として合わせ口となる。棺蓋となる高杯脚部は、埋葬時に打ち欠かれたものであろう。棺身は鉛直から約55°傾けた斜め方向で埋設され、

棺蓋はその開口部を覆うように同様に傾けて塞ぐ。棺身の主軸方位は、底部を起点とすれば、S-80°-Eである。

#### SX02 (図版15 写真図版10)

SX01の東に位置し、3基のうち中央に埋置された埋設土器である。墓壙は、平面はやや不整形ながら直径ほぼ0.65mの円形を呈し、深さは0.25m前後である。底面は平坦で、棺に比べて墓壙は広く構築されている。棺は頭部以上を意識的に打ち欠いた壺を棺身、高杯部を棺蓋として合わせ口となる。棺蓋となる高杯脚部は、埋葬時に打ち欠かれたものであろう。棺身は鉛直から約50°傾けた斜め方向で埋置されるが、その際、壺の胴部上半が真上に開口し、棺蓋はその開口部を覆うように水平に置かれる。棺身の主軸方位は、底部を起点とすれば、S-50°-Eである。

#### SX03 (図版14 写真図版10)

3基のうち西に埋置された埋設土器である。削平が著しく、棺身となる壺の底部が0.1m程度残存するのみであり、棺蓋は不明である。同じく、墓壙も遺存の状況は不良である。現存する墓壙は、直径0.35mの円形を呈するが、本来の規模はそれを凌ぐことはまちがいない。棺身の埋葬主軸方位は不明であるが、底部はほぼ直立の状態で埋置されていたようである。

### 3. 7世紀の遺構

この時期の遺構は、調査区の東側（下段）にのみ存在する。検出された遺構は、堅穴住居(SH04・05)2棟である。

#### 堅穴住居

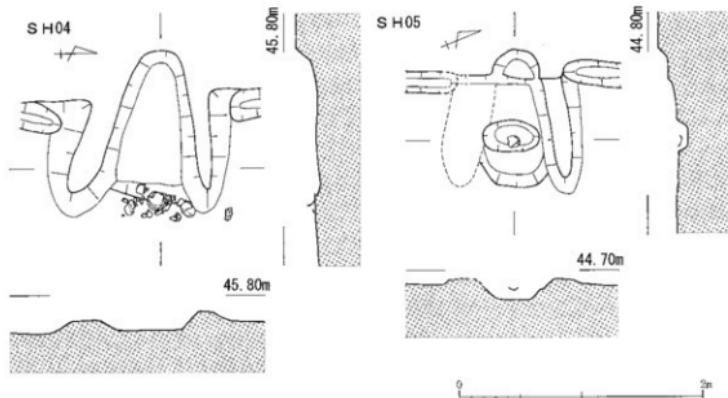
調査区東半部の中央部分に、2棟が南北に並ぶようにして設けられているが、各建物の方向には明らかなずれが認められる。いずれも平面形は方形を呈し、西辺の中央部に竈を伴うが、後世の削平・改変が著しく影響し、壁部の遺存状態は20cm前後の深さを測る状態となっている。特に傾斜の低くなる東側は非常に浅い残存状況を呈している。

#### SH04 (図版13 写真図版9)

**形状・規模** 下段（東半部）調査区中央部にある2棟の堅穴住居のうち、北に位置するのが本住居跡である。平面形は方形を呈するが、北辺が約6m強であり他の3辺が約7mとなるため、若干台形状の形態となる。これは下段が西から東への傾斜以上に、北から南への傾斜が急であるために、こうした構造上の措置がとられたものと考えられる。同様に、床面も東に傾斜する状態にある。西辺の中央や南に設えられている竈は、煙道部分を屋外へ突き出す形態であり、「ハ」字に聞く袖部は後に粘土によって作り設け、床部分を一段低くする造りとなる。詳細にみると、南側の袖がやや開き気味となるため、竈全体が少し南を向いた形態にあることを見て取れる。本住居跡自体の遺存状況が非常に悪いため、壁部はすべて失われ周壁溝のみが検出されているが、周壁溝は竈の袖部分に当たったところで掘削を止めている。また、竈と対応の東辺中央部では周壁溝が幅約1.8mにわたって途切れるため、出入り口として利用されていたものと考えられる。竈の焚口部（袖先端部の内側）では、須恵器の破片が比較的まとまった状態で出土しているとともに、北側袖の先端部には、若干小型の感もあるが、袖石を思わせる石が立った状態にある。柱穴はこれに伴うと思われるものを一応図化したが、並びが歪んでおり、確信は持てない。

**埋土** ほとんど存在していないが、周溝内はにぶい灰色細砂～粗砂を埋土としている。

**出土遺物** 遺構の遺存状態にも関係すると思われるが、住居内からの遺物の出土は非常に少ない状態に



第7図 SH04・05竪拡大図

ある。埋土内より須恵器杯H身541点、甕内より土師器鉢53・壺56が各1点出土している。

#### SH05 (図版13 写真図版9)

**形状・規模** SH04の直ぐ南側に接近して建てられている一辺約5mを測る方形平面の住居である。SH04とは若干方向が異なるのは、立地部の傾斜方向の違いに起因するものであり、時期的には同時併存の状態にあったものと考える。SH04と同様に、壁部はわずかに残存する程度であり、周壁溝によって形状を知ることができる。形態的にはSH04と同様の造りとなっており、西側の壁部中央に作りつけの窓を伴っている。南側の袖は調査上の不注意により損壊してしまったが、「ハ」字状に開き、床部が一段低くなる形態である。ただ本住居の場合は、その内部にさらに小さな土坑状の窓みが設けられる違いがある。この土坑の中には、須恵器の杯が1点残されており、焚口前面の床面が $20 \times 25\text{cm}$ の楕円形で赤色に変色する箇所が認められる。また、周壁溝は窓の袖部に当たったところで途切れるが、東辺ではSH04とは異なり、途切れることなく連続する形態となる。床面はSH04以上に南東方向に大きく傾斜する状況にある。各コーナーに接するように四柱穴を確認しており、そのうちの北西の柱穴には、柱穴内祭祀を行ったと思われる須恵器杯51と提瓶53が埋納されている。

**埋土** 窓は黄褐色の細砂をベース土として、黒色の灰・炭が多量に混入する埋土となっている。住居跡内は黒褐色の細砂～粗砂が埋土であるが、窓に近い部分は炭・焼土が大量に包含されている。

**出土遺物** こちらも遺物の出土量は少ない。図化できたものは須恵器のみであり、杯H身541点、杯H蓋あるいは杯身の可能性のあるもの501点、底脚の高杯541点、提瓶531点の4点である。このうち、51と53の2点は柱穴内祭祀に伴う遺物である。

#### 4. 中世の遺構

##### SB01 (図版14)

現状では $1 \times 2$ 間の建物をしているが、桁行3間の建物となる可能性も多い。位置的にはSH05と重複する。東に1間延びると考えた場合、東西方向の建物であり、梁間約2.4m、桁行約7.0mの規模を測

る。またSH05の床面で検出したピットを抽出すると、南側へ1間のびる可能性もある。柱間の距離は梁間間で2.4m、桁行間で1.6m～2.4mの長さの違いを見ることができるが、相対的には南側の梁間が北側のそれよりやや広い状態にある。柱穴はいずれも直径40cm弱の平面円形を呈する。深度的には、北より南側のものが深く、西より東が深い傾向にある。柱穴内からの遺物の出土はないが、想定復元図等から判断して中世期のものとした。

**埋土** 基本的に柱穴内の埋土はにぶい灰色であるが、西側のものは砂質となる傾向にある。

**出土遺物** 柱穴内からは、遺物はまったく出土していない。

#### SA01（図版14）

SB01の北側にあり、SH01と重複する状態にある。3間分の横列状の遺構を復元したが、上記したSH04の不確実な柱穴の2基を使うと、南に展開して梁間1間、桁行3間の建物を考えることもできる。さらに、東梁間柱列の北延長部に柱穴が1箇所存在することと、建物の北側の削平が著しいことも念頭に置くと、梁間2間の建物を考えることもできるかと思われる。桁行柱間の距離は約2.5m～1.5mであり、東に狭くなる状況にある。柱穴の直径が40cm弱であることと、その埋土が同質であることから、SB01と同一時期の遺構と考えたい。

**埋土** 基本的な柱穴埋土はSH04と同様な状況にある。

**出土遺物** 柱穴内からの遺物の出土はまったくない。

## 第4節 III区の調査

### 1. 概要

I区東側で、水路工事に先立って調査を行った。年ノ神遺跡の立地する段丘の西端にあたる。現況は竹林となっているが、調査区内からは石臼も含む集石遺構や遺構面に据えられた備前窓の底部を検出した。I区と同様にIII区も近世においては屋敷地になっていたようである。

近世の掘り込みと重複して、弥生時代の竪穴住居（SH01）を1棟検出した。調査区の制約により、1/2程度を検出しただけである。また近世の掘り込みにより、残存は良好でない。周壁溝は半円状に巡ることから、平面は円形を呈すると考える。検出面からの深さは残存する部分で50cmを測る。床面では主柱穴と思われる柱穴を1基検出した。

## 第5節 IV区の調査

### 1. 概要

年ノ神1～5号墳と6～9号墳の調査区の中間、標高63～67mに位置する。平成5年度の確認調査で、古墳の周溝の可能性がある溝を検出したため、全面調査に移行した。当初は北山古墳群A地区と呼称して調査を行った。

検出した遺構は、テラス状遺構、ピット、土坑、溝である。いずれの遺構からも遺物が出土していないため、所属時期は明らかでない。

テラス状遺構は調査区南端で検出した。等高線と平行に溝が延び、東側端部はL字状に屈曲する。溝の規模は、幅0.7～0.8m、深さ0.2mを測る。溝はさらに西側調査区外に続く。この溝に平行して3基のピットが並ぶ。規模は径0.6～0.7m、深さ0.3～0.6mである。各ピット間の距離は約2mである。

溝は、調査区北東隅付近から南西方向に断続的に続く。検出長は13mである。土坑、ピットはこの溝とテラス状遺構の間に分布するが、特に意図的な配列などは何えない。

## 第8節 出土遺物

### 1. 弥生土器

1～5、8～27はⅠ区から出土した土器である。

1はSX01出土の土器である。口縁部を欠損するが広口壺である。胴部最大径を中位に持つ、屈曲の緩い算盤玉状を呈する。外面は胴上半部に5～6条を1単位とする直線文を3箇所に施し、その間を交互に波状文が巡るようだが、磨滅により図化が不可能であった。また、下半部は縱方向のヘラミガキで仕上げる。胴部中位には焼成後穿孔を施す。胴部径31.5cm、底径8.2cm。

2はSH01出土の土器であり、壺の底部と考えられる。外面は縱方向のハケメ、内面は縱方向のケズリである。底径7.7cm。

3・4はSH03の中央土坑出土の土器であり、共に鉢の口縁部である。3は椀状に立ち上がるるもので、口縁端部は外端部に扁平な帯状の粘土を貼付して肥厚させたもので、上端部は平坦面を持つ。体部外面は斜方向のハケメ、内面はハケメの後にミガキで、口縁部はヨコナデである。口径不明。

4も外端部に扁平な帯状の粘土を貼付して肥厚させた口縁端部で、上端部は平坦面を持つ。外内面は共にヘラミガキで仕上げる。口径不明。

5はSH05出土の土器であり、高杯の杯部である。屈曲の緩い受け口状の口縁部である。屈曲部には2条、口縁部下には1条の凹線文を施す。外面は縱方向のミガキで仕上げる。口径22.1cm。

6・7はⅢ区SH01から出土した。6は高杯あるいは脚付鉢等の脚部である。短い柱状部から、短くラッパ状に聞く裾部を持つ。脚端部は上方に拡張して面をなす。柱状部外面には8条の退化四線が巡り、裾部には8箇所の円孔を施す。外面は縱方向のヘラミガキ、内面は横方向のケズリである。底径10.7cm。7は把手付広片口鉢である。上げ底の底部状の把手部は、やや内彎する「耳」形を呈する。外内面ともに丁寧なナデで仕上げる。把手部高3.8cm。幅8.5cm。

8～11はSK04出土の土器である。8は甕である。上半部と底部のみ残存し、同一個体であるため図上での復元を行った。最大径を上位に持つ胴部で卵倒形を呈し、稜の緩い「く」字状口縁を持つ。口縁端部は上方へ僅かにつまみだす。胴部外面は縱方向のハケメ、内面は強いイクナデで、底部外面はミガキである。口径約14.6cm、胴部径約19.5cm、底径6.3cm、復元器高約29.5cm。9は高杯である。杯部と脚部は接点を持たないが、同一個体であるため図上での復元を行った。杯部は浅い椀状を呈し、口縁端部は僅かに肥厚して上端で面をなす。脚部は柱状部から緩やかに聞くラッパ状を呈する。脚部から杯下半部外面は縱方向のヘラミガキ、杯上半部から杯部内面は横方向のヘラミガキを施す。口径約18.6cm、脚部径約10.7cm、復元器高約16.5cm。10は高杯の脚部である。短い柱状部から脚部付近でやや内彎しながらラッパ状に聞く脚部を持つ。脚端部はやや肥厚する。柱状部外面には6条のヘラガキ沈線、脚部外面には3条の凹線文を施す。また、脚部は5方1単位の円孔を交互に3段施す。外面はナデ、内面はケズリである。脚部径約13.9cm。11は大型鉢の口縁部である。やや内傾しながら立ち上がり、口縁部は逆L字状を呈する。外面は横方向のタキの後に、内面と共に丁寧にナデで仕上げる。口径不明。

12・13は西半部の土坑から出土した。12は壺の底部である。やや丸味を帯びた平底から、大きく聞く胴部を持つ。底部中央は焼成前穿孔を施す。外内面は共に縱方向のケズリで仕上げ、接地部分もケズリ

を施す。底径約7.7cm。13は受け口壺である。口縁部と胴下半部のみの残存だが、同一個体ということから図上での復元を行った。口縁部は強く窄まる頸部から受け口状に立ち上がる口縁部を持つ。外面には2条の凹線文を施し、頸部外面には指頭圧痕突帯を貼付する。外内面は共にヨコナデで仕上げる。底部は焼成前の穿孔を施す。調整は不明である。口径約12.8cm、底径約7.3cm。

14・15はSK03出土の土器である。14は壺の口縁部である。緩い窄まりから大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部は僅かに肥厚する。頸部外面には、現状で2条の浅い凹線文を施す。外内面は共にヨコナデで仕上げる。口径約13.8cm。15は把手付広片口鉢である。上げ底の底部状の把手部は、やや内彎する「耳」形を呈する。外内面は一部ケズリの後に丁寧なナデ、及びミガキで仕上げる。把手の一部には赤色顔料が付着する。

16～18はピットから出土した土器である。16は壺形のミニチュア土器である。やや丸味を帯びた平底に、中位に最大径を持つ卵形の胴部を持つ。底部から下半部外面はケズリ、上半部外面はナデで、内面はユビナデで仕上げる。胴部径約7.6cm、底径3.1cm。17は大型の壺の底部である。外面は縦方向のケズリ、内面はナデで仕上げる。底径約12.0cm。18はミニチュア土器である。外内面は共にナデで仕上げ、やや指頭圧痕も残る。底径約3.4cm。

19～22はSD01出土の土器である。19は大型の壺の底部である。平底から大きく開く胴部を持つ。外側は横方向のタタキの後に縦方向のイタナデ、内面は丁寧なナデで仕上げる。底径約8.2cm。20は高杯の杯部である。屈曲が緩く浅い受け口状の口縁部を呈する。口縁端部は外側へ僅かに拡張して上端に面をなす。外内面は共に横方向のヘラミガキを施す。口径不明。21は大型の鉢の口縁部である。口縁部は外側へ大きく突出する「逆L」字状を呈する。外内面は共に横方向の丁寧なヨコナデ、及びヘラミガキで仕上げる。口径不明。22は胴部の破片だが、器種不明である。外面の一部にはヘラガキ鋸歯文、その内区には右上がりの斜行文を施す。外面は横方向のタタキの後にナデ、内面はミガキで仕上げる。

23～32は包含層出土の土器である。23は大型の壺の口縁部である。口縁部は後の緩い「く」字状を呈し、口縁端部はやや上方へ拡張して面をなす。壺面上には細い2条の凹線文を施す。胴部内面はハケメの後ナデ、口縁部はヨコナデで仕上げる。口径約24.8cm。24は高杯の口縁部である。口縁部は水平口縁を呈し、杯部上端の突出が明瞭で、口縁端部も大きく垂下する。外内面は共にヨコナデである。口径約20.6cm。25は大型広口壺の口縁部である。大きく外反する口縁部で、口縁端部は上下方に拡張して面をなす。壺面上部には1条の凹線文が巡り、櫛状工具による刺突文が2段で施文される。また、その上には貼付した円形浮文の剥離痕が残る。外内面はヨコナデである。口径約24.6cm。26は高杯及び合付鉢等の脚部である。短くラッパ状に開く裾部を持ち、脚端部は僅かに肥厚して面をなす。端面には3条の凹線文を施す。裾部には6個単位の円孔を2段で交互に施す。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のケズリの後にナデである。脚部径約13.0cm。27は高杯の脚部である。短い柱状部から大きくラッパ状に開く裾部を持つ。脚端部は上下方に大きく拡張して面をなす。裾部には円孔を2～4箇所に施し、柱状部外面には8条の擬凹線文を施す。外面は縦方向の細かなイタナデ、内面は横方向のケズリである。脚部径約12.1cm。

28～32は年ノ神6～9号墳の調査区から出土した土器である。

28は広口壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は上下方に大きく拡張して面をなす。端面には羽状列点文、壺部内面には波状文を施す。外内面は共にヨコナデである。口径約19.5cm。29は把手付直口壺、所謂水差しである。上位に最大径を持つ卵倒形の胴部で、やや内彎気味に直口する口

縁部を持つ。口縁部外面には7条の凹線文を施し、胴上半部には2箇所の刺突列点文を施す。外面は縱方向を主体とするハケメで、口縁部はヨコナデである。口径約11.8cm。胴部径約21.6cm。底径約6.0cm。器高31.1cm。30・1・30・2は同一個体の変と考えられるが、一応個別に記述した。口縁部（30・1）は稜の緩い「く」字状を呈し、口縁端部はやや上方へつまみ出して面をなす。胴部上位外面には刺突列点文を施す。口縁部及び底部（30・2）の外面は縱方向を主体とするハケメで、上位部分に横方向のハケメを施す。内面はおそらくイタナデであろう。口径約15.4cm。底径約6.3cm。31は広口壺の胴部であろう。外面には7条1単位の直線文を2条、その下に6条1単位の波状文を1条施す。下位外面は波状文直下を横方向、その下を縱方向のヘラミガキで仕上げる。内面はイタナデ、及びナデである。32は大型の壺の胴下半部である。胴部は卵円形を呈するものであろう。外面は縱方向のハケメ、内面は縱方向を主体とするハケメの後ナデで仕上げる。底径約8.6cm。

33～45はⅡ区から出土した。

33はSH06出土の土器である。33は小型の壺の口縁部である。稜線の緩い屈曲から外反しながら短く開く「く」字状を呈する。口縁端部は上方へ僅かにつまみ出す。腹部内面は横方向のケズリ、口縁部はヨコナデで仕上げる。口径約10.2cm。

34はSH01出土の土器である。34は壺の口縁部である。大きく外反する口縁部で、口縁端部は肥厚して面をなす。端面には波状文を施す。外内面は共にヨコナデである。口径約15.2cm。

35・36はSH03出土の土器である。

35は壺の口縁部である。やや直口気味の頸部から短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は、若干丸味に肥厚する。外内面は共にヨコナデである。口径約11.8cm。

36は高杯の杯部である。浅い鉢状の杯端部に内傾する突出部が付く、所謂水平口縁を呈する。口縁端部は欠損し、明確でないが、若干垂下するものと考えられる。杯部外面は縱方向、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。口縁部はヨコナデである。口径約21.2cm。

37・38はSH02出土の土器である。

37は小型の壺の口縁部であろう。やや直口気味の頸部から短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は僅かに下方へ肥厚して面をなす。頸部外面にはヘラミガキを施す。また、外内面には赤色顔料を塗布した痕跡が残る。口径約15.4cm。

38は高杯及び台付鉢等の脚部である。短くラッパ状に聞く縁部を持つ。脚端部は上下方へ若干肥厚して面をなす。脚端部付近には小さな円孔を2箇所施す。柱状部には4条の凹線文を巡らす。外面はヘラミガキ、内面は横方向のケズリを施す。脚部径約13.2cm。

39・40は埋設土器SX03を構成する土器である。39は棺蓋となる高杯の杯部である。浅鉢状の杯に受け口状の口縁部を持つもので、口縁端部は内外方へ僅かに肥厚して上端に面をなす。口縁部立ち上がりの屈曲部外面には1条の凹線が巡る。外面は柱状部から杯下半部で縱方向、上半部以上は横方向のヘラミガキ、内面は横方向を主体とするヘラミガキで仕上げる。口径29.4cm。40は棺身となる広口壺である。中位に最大径を持つ後の緩やかな算盤玉状の胴部で、強く窄まる頸部から短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は下方に大きく拡張して面をなす。端面には5条の凹線文を施した後に2箇1単位の円形浮文を貼付する。口縁端部内面には刺突列点文を巡らす。胴上半部外面には7本1単位の直線文を11条、その下に同単位の波状文を施す。胴下半部外面は中位で横方向、下位で縱方向のヘラミガキを施す。内面は胴下半部で縱方向のハケメ、上半部で斜方向のイタナデである。口径20.5cm、胴部径33.5cm、底

径8.0cm、器高40.5cm。

41・42はSX02出土の土器である。41は棺蓋となる高杯の杯部である。浅鉢状の杯縁部に突出部を有する水平口線を持つもので、口縁端部は大きく垂下して鉢形をなす。柱状部から杯部外面は縦方向、杯部内面は横方向を主体とするヘラミガキを施す。口縁部はヨコナデである。口径19.8cm。42は棺身となる壺で、把手の痕跡から所謂水差し形の直口壺と考える。上位に最大径を持つ卵倒形の胴部で、強く窄まる頸部を持つ。口縁部は欠損する。頸部付近外面には把手が剥離した痕跡が残る。胴部外面は縦方向のハケメを主体とするが、下半部には横及び縦方向のヘラミガキを施し、上半部には右下がりのタタキが残る。また、内面は下半部が縦方向のケズリ、上半部が斜方向のハケメで仕上げる。胴部径29.5cm、底径7.2cm。

43はSX01出土の土器である。43は大型の壺の底部である。底部中央よりには焼成後穿孔を施す。外側は縦方向のハケメの後に縦方向を主体とするヘラミガキで仕上げる。底径7.2cm。

44・45は包含層出土の土器である。44は台形土器である。台の天部は中央に向かってやや凹み、台の端部に付く脚部は内へ大きく反る。外面はハケメを主体として仕上げ、内面はナデで、指頭圧痕が残る。台部径約25.0cm。45は把手付広片口鉢の把手部にあたる。上げ底状の底部を断ち割った様な形態であるが、残存部が少ないと把手の形状も不明である。外面は細かなケズリを施し、内面は丁寧なナデ若しくはミガキで仕上げる。

## 2. 須恵器・土師器

### I 区埋設土器

須恵器杯蓋46は口縁部がやや外側に開き、天井部はヘラ切り不調整である。須恵器壺47は口径15.9cm、器高29.1cm。外面に平行叩き、内面に同心円の当具痕が残る。底部周辺は叩き出しの後、ヘラ調整を施している。器歯が厚く重量感がある。

土師器壺48は口径13.9cm、器高17.2cm、体部の最大径は16.6cmで口縁部の屈曲が少ない。体部の上半部は縦方向のハケ、下半部は横方向のハケ調整が行われている。内面は底部から放射状に上方向に削り上げられている。土師器壺49は口径28.5cm、器高26.1cm、体部の最大径は27.9cmで口縁部を大きく屈曲させる。

### II 区SH05

50は須恵器杯H身で口径9.5cm、器高3.0cm、底部ヘラ削りを施す。残存率は5分の2。51は口径9.7cm。天井部は粗いヘラ削りを行い、口縁部は外側に開く。但し、杯身になる可能性もある。52は口径11.3cm、器高6.6cmの低脚の高杯で、ほぼ完品である。口縁端部はわずかに内湾している。外面はナデ調整を行う。提瓶53は、体部全面は丸くふくれ、内面に閉塞円盤の痕跡を残す。外面はヘラで調整している。背面は平らでヘラ削りを施している。体部側面には円形の浮文を貼りつける。

### II 区SH04

54は須恵器杯H身で口径10.9cm、器高3.8cm、底部ヘラ削りを施す。55は5分の1程度の破片で残存状態は悪く、内外面の調整不明である。56は底部を欠くが、48と同形態の壺になろう。

### 包含層出土遺物

須恵器の椀類・杯類、土師器の皿類が出土している。椀類は9世紀代のもので、輪高台を有するもの(58・59)と平高台を有するもの(60・61)がある。58は口径16.0cm、器高6.6cm。体部が直線的に

立ち上がる 8 世紀の杯Bの系譜を引く形態である。59は口径16.1cm、器高6.0cmで、体部が湾曲して立ち上がる瓷器系陶器の系譜をひく形態である。60・61はヘラ切りの平高台をもつ瓷器系の椀である。底部内面に段を有し、底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。60の内面には使用痕跡が残る。57は底部ヘラ切りの杯Aで椀類とほぼ同時期のものであろう。

62・63は底部ヘラ切りの土師質の皿であるが、年代については判然としないが、須恵器と同時期と一応考えておきたい。

### 3. 鉄器

鉄器は全てⅡ区竪穴住居から出土したものである。M 1～3はSH01、M 4はSH03、M 5～7はSH02から出土した。このうちM 1・2は中央土坑出土、その他は埋土から出土している。実測は実物の観察とX線写真を併用した。いずれも不明製品で、天地や欠損状況も明らかでない。M 1は全長3.8cmを測る。断面が三角形を呈し、刃部状である。右上半部の先端は若干折り返すように見てとれる。M 2は全長2.0cmを測る。茎状であり、断面形は長方形を呈する。M 3は全長2.2cmを測る。不定形でスラッグと思われる。M 4は全長3.2cmを測る。板状のもので、断面は長方形を呈する。M 5は2.0cmを測る。台形状を呈し、端部の断面はやや丸みをもつ。M 6は2.5cmを測る。上へ幅を狭める形状である。M 7は2.8cmを測る。一見鎌状であるが、断定しえない。

### 4. 石器

石器の出土は非常に少なく、竪穴住居からは細片すら出土していない。明らかに製品と確認できるのは実測した3点にすぎない。実測したものはすべてⅡ区から出土したものである。

S 1はSH03埋土出土の打製石鎌である。平面形が三角形を呈する平基無茎式石鎌である。先端を欠くが、現存長2.1cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。肉眼観察では金山産サヌカイトを用いている。S 2は包含層から出土したもので、磨石と思われる。先端部に使用痕が残る。S 3は包含層出土の柱状片刃石斧である。長さ22.8cmと大型のものである。全面にわたって研磨を施している。

## 第4章 大二遺跡の調査

### 第1節 遺跡の立地と調査の方法

遺跡は南西に向いた谷が開口する、土石流タイプの扇状地末端部に立地し、標高32.3～4mを測る。現在、谷は堰堤で仕切られ溜池となっている。遺跡の東側は丘陵の末端が南北方向に延び、西側は国道175号線が南北に走る。国道175号線は盛土で構築されているために調査対象地は東の丘陵末端部と国道に挟まれて、細長い底地となっている。このため、一定の深さまで掘り下げるに、池の水圧によって下層から湧き水のように水が一気に吹き出すという極めて劣悪な条件下での調査となった。

調査区は里道を境に北地区と南地区の2つに分割したが、北地区については、湧水による影響を最小限に留めるために、調査区を細かく区切って発掘を実施したが、それでも湧水による影響は避けられず、遺物採集を中心とした調査に限らざるを得なかった。また、南地区については、拡幅用地幅が狭く、かつ確認調査結果では掘削深度が深くなることが予測されたために、用地幅いっぱいに調査区を設定することが不可能なために幅3m程度のトレンチ状の調査となった。

### 第2節 調査の概要

調査対象地は扇状地末端部に立地しており、北地区と南地区では堆積状況が若干異なるが、土層は扇状地堆積層で構成されており、両地区の基本層序は以下の通りである。北地区における基本層序は①耕作土、②黄褐色小礫～粗礫、③灰色シルト質中砂～粗砂、④灰色細礫～中砂、⑤黒色シルト混じり中砂となる。一方、南地区での基本層序は、①耕作土、②オリーブ色シルト（細砂・中砂を含む）、③灰色シルト質極細砂、④明灰色シルト質極細砂、⑤灰色極細砂質シルト（粗砂・細礫含む）、⑥黒色シルト混じり中砂、⑦暗灰色シルト（有機質を含む）となっている。

### 第3節 遺物出土状況

遺物の出土は北地区に集中しており、南地区では極めて少量である。北地区での出土遺物は、古墳時代～奈良時代の土器、弥生時代中期の土器があり、古墳時代～奈良時代の土器は第4層灰色細礫～中砂層、弥生時代中期の土器が第5層黒色シルト混じり中砂層から出土している。いずれも堆積層からの出土であり、遺構からの出土ではない。遺物はローリングを受けておらず、谷の奥部から流されてきたものではない。遺構は調査区内では検出されていないが、関連する集落は近接して所在すると判断している。さらに出土が北地区に集中していることと土層の堆積状況から判断して、大二遺跡に関連する集落は、調査区の北西の現国道付近に所在している可能性がある。

### 第4節 出土遺物

大二遺跡から出土した遺物は、その殆どが黒色シルト混じり中砂の包含層から出土している。

65は壺の口縁部であろう。口縁部が短く開く短頭のもので、口縁端部は僅かに肥厚して面をなす。端面には1条の凹線文を巡らす。口縁端部下外側にはやや丸味を帯びた断面台形状の突帶を貼付し、突帶上にはキザミメを施す。内面は斜方向のハケメの後にヨコナデである。口径19.1cm。内面に赤色顔料が付着する。

66は広口壺の口縁部である。大きく外反する口縁部で、口縁部は下方へ大きく拡張して面をなす。端面上には7条の凹線文を巡らした後に、一定の間隔をおいてヘラガキ平行文を施し、その間隔を埋める様に3個1単位の竹管形円形浮文を貼付する。

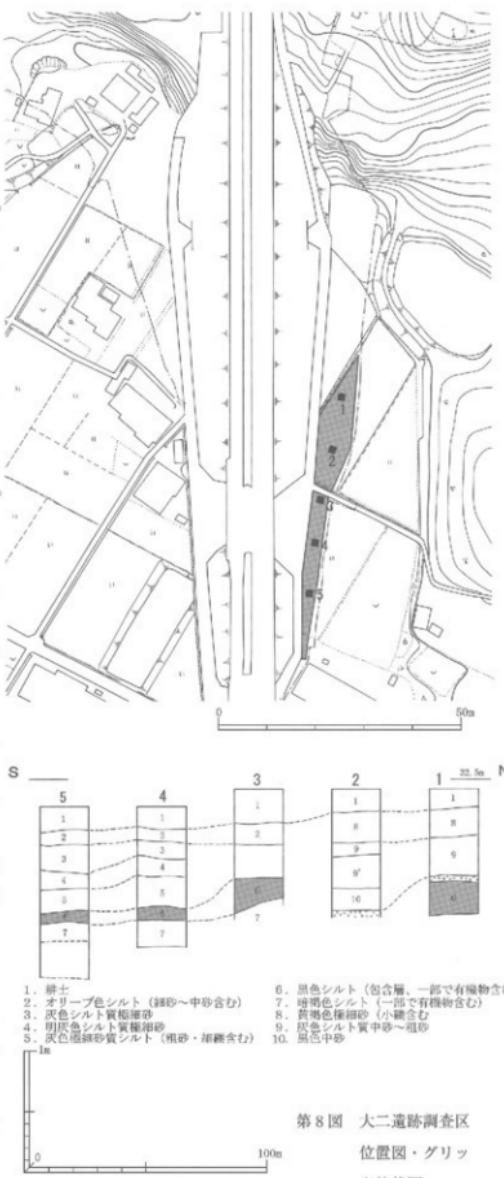
また、口縁端部内面には異なる2方向の刺突列点文を互い違いに組み合わせて羽状に施文している。外面は縱方向のハケメ、内面はナデ及びヨコナデで仕上げる。口径約40.8cm。

67は小型の壺である。下半部を欠損している。上位に最大径を持つ卵倒形の胴部で、後の明瞭な屈曲で短く外反する「く」字状口縁部を持つ。口縁端部は上方へつまみ出して面をなす。胴部外面は縱方向のハケメ、内面は斜方向のハケメの後ナデで仕上げ、指頭圧痕も残る。口縁部はヨコナデである。口径約12.1cm。胴部径約15.2cm。

68は甕であろう。口縁部を欠損している。上位に最大径を持つ卵倒形の胴部である。底部は大きく穿孔を施している。外面は底部付近で縱方向のイタナデで、部分的に横方向のタタキ、指頭圧痕が残る。内面は縱方向のケズリで、部分的にハケメが残る。底径約6.8cm。

69は大型の鉢の口縁部である。やや椀状に立ち上がる体部を呈する。口縁端部は扁平な帯状の粘土を貼付して、上端に面を持つ。外面は縱方向のハケメ、内面は斜方向のハケメの後にヘラミガキを施す。内面に赤色顔料が付着する。口径約36.2cm。

70は台付鉢である。脚部は短くラ



第8図 大二遺跡調査区

位置図・グリッド

ド柱状図

ッパ状に開く裾部を持つもので、脚端部は肥厚して面をなす。鉢は上位に最大径を持つ鉄鉢状の体部に、後の長い屈曲から短く開く「く」字状の口縁部を持つものである。口縁端部は僅かに肥厚して面をなす。外面は脚部から鉢下半部を縱方向、上半部を横方向のヘラミガキで仕上げる。鉢部内面は底部付近と上位を横方向主体のヘラミガキ、中位から下位を斜方向のハケメで仕上げる。また、脚部内面は横方向を主体とするケズリを施す。口径約16.7cm。体部径約18.3cm。脚部径約12.2cm。器高約17.4cm。

72は台付き鉢等の脚部である。短い柱状部から短くラッパ状に開く裾部を持つ。脚端部は僅かに肥厚して面をなす。脚端部付近には18箇所程と考えられる小さな円孔を施し、柱状部外面には4条の凹線文が巡る。端部付近はヨコナデ、内面は横方向のケズリで仕上げる。脚部径約11.8cm。

73はミニチュア土器である。やや下彫れの椀状で、口縁部は僅かに折り曲げる程度である。全体の成形が手捏ねのため、指頭圧痕が顕著に残る。外面はユビナデ、内面はケズリの後ユビナデで仕上げる。口径5.5cm。器高4.5cm。

74はヘラガキによる施文を持つ土器片である。残存部が少ないため、モチーフは不明であるが、鹿の体の一部ではないかと考える。

75は把手付広片口鉢である。器形は上げ底の底部を持つ壺を縦に断ち割った様なもので、その底部にあたる付近が「耳」状に変形して把手部となる。外面はハケメの後丁寧なナデで、把手付近には指頭圧痕が残る。内面はヘラミガキで、把手部内面は、丁寧なユビナデを施す。また、器壁の表面あるいは断面には、水銀朱と思われる赤色顔料が付着、若しくは染み込んでいる。横倒しにした状態(75-2)が正位置としてよければ、器高10.2cm、把手部外径8.6cm。把手部内長8.3cm。把手部内幅2.5cm。

71は土師器の高杯である。脚裾部を欠損する。杯部は深い皿状を呈し、口縁端部にはナデによる沈線を1条施す。脚部は円錐状に開く柱状部を持つものである。杯部外面は縦方向、内面は横方向のハケメで仕上げる。また、脚部外面は縦方向のイタナデ、内面はケズリで仕上げる。口径約19.3cm。

76は数点の破片が出土し、全容は不明だが、外面が瓦質を呈する壺形土器である。体部外面は格子タキを施す。口縁端部は平坦になる。いわゆる韓式系土器と思われる。

77は土師器壺である。球形を呈する体部の外面は細いヘラ状工具で不定方向のナデを施す。

## 第4章 まとめ

### 第1節 年ノ神遺跡

#### 1. 弥生時代

##### 立地と範囲

年ノ神遺跡は丘陵裾の段丘上に東西に帯状に広がる集落遺跡である。立地については、美濃川流域で検出された与呂木遺跡（註1）、細川女谷遺跡（註2）、鳥町遺跡（註3）、正法寺山古墳群（註4）など同時期の集落遺跡と共に通している。

遺跡の範囲であるが、Ⅲ区西側の溜池付近で段丘が途切れ、遺跡の西端になると思われる。東側は遺跡の立地する段丘がさらに続き、Ⅱ区と国道175号線を挟んだ墓地付近で弥生土器片が採集されている（註5）ことから、その付近まで遺跡が広がるのは確実と考える。遺跡の所在する段丘上と平野部との比高差は8m前後あるが、段丘下には遺跡は広がらない。本遺跡の南東に所在する大二遺跡は湿地の様相を呈し、5号水路の確認調査でも美濃川までの間は、生活域となるような安定した地点は確認できなかった。大二遺跡の調査成果から、少なくとも弥生・古墳時代を通して、丘陵裾付近まで美濃川旧流路の影響を受けていたと考えられる。北側については、背後の丘陵上に遺跡が広がる可能性がある。国道東側の鳥町北山古墳群付近の尾根先端でも土器の散布がみられる（註6）。また年ノ神6～9号墳の調査では遺跡の西端を確認したにすぎないが、土坑や周壁溝状遺構を検出している（註7）。丘陵上から出土した土器と、年ノ神遺跡出土の土器を比較すると、さほど時期差はみられず、両者は同時併存していたと考える。丘陵上については、本遺跡西側の丘陵上に所在する貝谷遺跡（註8）のような墳墓群となる可能性も否定できないが、詳細は不明のため、今後の調査に期待したい。

##### 集落の単位

年ノ神遺跡で検出した弥生時代の遺構を子細に観察すると、地形により、①Ⅰ区西端のSH05付近からⅢ区、②Ⅰ区東半部、③Ⅱ区の3単位に集落を細分できる。①と②の間は浅い谷状地があり、遺構は疎らとなる。②と③の間は大きな開析谷があり込み、完全に分断される。Ⅱ区はさらに西半部と東半部以東に細分できるかもしれない。①については調査区の制約があるものの、各単位の中には重複しない3棟程度の堅穴住居と少なくとも1基の埋設土器がみられる。第3節に記述したが本遺跡からは県内では最多の把手付広片口鉢が出土しているが、各単位からは1点の把手付広片口鉢が出土している。

##### 鉄製品について

Ⅳ区の複数の堅穴住居からは鉄製品が出土している。一方石器の出土は少なく、堅穴住居の残存状況がよくないとはいえ、住居内からの石器の出土なく、石片もほとんど見られない。美濃川流域では与呂木遺跡でも堅穴住居内から鉄鎌などまとまった鉄器の出土があり（註9）、この時期、美濃川流域では石器から鉄器への転換が進行していたのではないかと考えられる。ただし本遺跡、与呂木遺跡とも不明製品も含めて比較的小型のものが多く、使用された鉄製品は小型のものに限られていたと思われる。

#### 2. 古墳時代後期

当該時期の遺構はⅠ区で埋設土器群、Ⅱ区で堅穴住居2棟を検出した。これら遺構から出土した須恵器は丘陵斜面に立地する年ノ神1・2号墳（註10）出土のものと同時期のものと考える。したがって古墳・埋設土器・住居は同時併存し、年ノ神1～5号墳の母集落はⅡ区の集落と判断して間違いないだろ

う。埋設土器の性格は明確でないが、土器棺またはなんらかの祭祀が考えられる。I区は1・2号墳と上下の位置関係にあり、埋設土器以外に当該時期の遺構はなく、遺物も出土していないことから、生活域であった可能性は低い。I区とII区とは谷を挟み、この谷を境に生活空間と祭祀または墓域としての空間が明確に区別されていたと思われる。

先にも記述したが、年ノ神遺跡では竪穴住居を2棟検出している。一方、西に約1.2km離れた和田神社遺跡（註11）でも同時期の集落を検出している。両遺跡から出土した須恵器は、胎土の肉眼観察では生産地が同一である可能性が高く、形態も極似していることから、この2つの集落は同時併存している可能性が高い。年ノ神遺跡は竪穴住居のみの集落であるのに対し、和田神社遺跡は掘立柱建物のみで構成される集落である。竪穴住居を主体とする集落と掘立柱建物を主体とする集落が近距離にある例は、龍野市長尾・小畠遺跡群（註12）でもみられる。7世紀代は掘立柱建物が普及する時期であり、美濃川流域でも竪穴住居から掘立柱建物へ転化しつつあるのだろうが、年ノ神遺跡はなんらかの要因によって掘立柱建物への転化が遅れた集落だったのだろう。

### 3. 奈良時代以降

奈良・平安時代に属する遺物は比較的出土したが、遺構は確認できなかった。また中・近世においても生活域として利用されていたようで、それに伴う若干の遺構を検出している。鳥町周辺では、生活域が段丘を降り美濃川沿いの平野部へ進出できたのは近世に入っていることと思われる。

## 第2節 大二遺跡

調査区の制約や湧水のため十分な調査が行えなかったことが悔やまれる。断面の土層観察では湿地の様相を呈し、流路の淀みに土器が堆積したものと考える。土器は弥生時代中期から奈良時代のものがあり、摩滅が少ないとから近接する集落の存在が考えられる。具体的には大村集落付近から現国道までの丘陵裾に想定できるだろう。弥生土器は年ノ神遺跡とほぼ同時期であり、年ノ神遺跡同様に把手付広片口鉢を所有していたようである。集落自体が未検出であるため、多くは語れないが、内面に朱の付着する鉢などが出土しており、朱の生産・保管を行っていた可能性がある。

また、古墳時代の遺物のなかには韓式系土器がある。加古川流域は比較的韓式系土器の出土が知られているが、その支流美濃川流域では、年ノ神6号墳出土の土器も含めて初めての出土であり、狭い範囲で古墳と古墳以外（集落？）から出土したことになる。ここに古墳時代中期における美濃川流域の有力な集団が存在したことは間違いないだろう。この集団の墳墓が年ノ神6～12号墳、鳥町北山古墳群、大村坂古墳群となるのであろう。

### 註

1. 兵庫県教育委員会『与呂木遺跡』兵庫県文化財調査報告第133冊 1994年
2. 中村 浩「久留美毛谷」毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会 1990年
3. 三木市教育委員会『三木市遺跡分布地図』2001年
4. 三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』2000年
5. 三木市教育委員会『三木市鳥町北山古墳群発掘調査報告書』 1979年
6. 前掲註3

7. 兵庫県教育委員会『年ノ神古墳群』兵庫県文化財調査報告第234冊 2002年
8. 兵庫県教育委員会『貝谷遺跡』兵庫県文化財調査報告第236冊 2002年
9. 前掲註1
10. 前掲註7
11. 兵庫県教育委員会『和田神社遺跡』兵庫県文化財調査報告第238冊 2002年
12. 龍野市教育委員会『長尾・小畠遺跡群』龍野市文化財調査報告21 1999年

### 第3節 年ノ神遺跡・大二遺跡出土の把手付広片口鉢と兵庫県下の新資料

#### 1. 本遺跡出土の把手付広片口鉢について

本調査で出土した把手付広片口鉢は、遺存状況の悪いものも含めて4点を数える（年ノ神遺跡出土7・15・45、大二遺跡出土75）。出土した殆どが把手部とされる部分で、全体の形態を復元するには困難だが、恐らく卯形の平面形を呈するものと考えられる。また、体部は全体を丁寧なヘラミガキ及びイタナデで仕上げる他、内面に赤色顔料の付着が見られるものがあった。特に、大二遺跡出土の資料（75）は器体内にまで赤色顔料が浸透している状況が観察できた。さらに、体部外面は僅かながら二次焼成痕跡も見られた。

把手付広片口鉢については、兵庫県大山遺跡、大阪府巨摩遺跡などの出土例が早くから知られていたが、福岡県辻垣遺跡の調査例（柳田康男氏呼称の「広片口三耳鉢」）を切っ掛けに、赤色顔料、特に水銀朱の使用との関係が指摘された。その後、香川県太田下・須川遺跡、同県上天神遺跡、徳島県名東遺跡、福岡県須玖永田遺跡、佐賀県寄吉原遺跡など出土例が増加し、その広がりが弥生時代中期後半～弥生時代後期前半の近畿地方から九州地方を結ぶ瀬戸内沿岸地方という、かなり限定された時期の調査された地域に分布する事が明らかになってきた。

特に香川県上天神遺跡では80個体以上が出土し（報告では「把手付広片口皿」と呼称）、その出土点数は群を抜いている。報告では、上天神遺跡の出土例の多くは体部内面に赤色顔料の付着が見られ、分析の結果、分析対象23個体の内19個体が水銀朱であり、資料の中には「粘土接合部の細かい亀裂に沿って」土器の器体内にまで赤色顔料が浸透しているものもあるという。その機能については「液状化した赤色顔料の使用に関わる」「専用具として特殊化したもの」と位置づけた上で、朱の製造過程での最終段階、あるいは製造後顔料を使用する過程での使用を想定している。

本遺跡出土のものは、上天神遺跡出土のものと類似しており、同様の機能を持ち合わせた遺物である可能性が非常に高いが、それ以外には水銀朱に関わる遺物、例えば石斧・石臼等の朱の製造に関わるもの、あるいは内面朱付着土器と呼称される大型鉢類等の朱の流通に関わると考えられているものは出土しておらず、遺構からも朱の痕跡は確認できなかったため、実際の使用を裏付けるまでには至っていない。しかし、本遺跡が水銀朱の産出地ではない播磨にあって、朱の製造の最終工程あるいは朱の使用（消費）に密接な関わりを持っていたことは、把手付広片口鉢自体の特殊性と、把手付広片口鉢が播磨の弥生時代の遺跡で普遍的に出土するものではないことからも明らかである。

それでは、なぜこののような特殊な遺物が本遺跡で出土するのであろうか。そこには、水銀朱の供給とその入手に敏感となる必然性を持った集落立地であったことが考えられる。年ノ神遺跡・大二遺跡はともに加古川の支流である美濃川が形成した平野に南面する段丘上に立地し、本流の加古川にも比較的近い。加古川は低分水嶺を結節点として上流域で由良川とつながり、古来より活発な交流及び物流を促す

道として知られている。また、特に弥生時代においては、この河川ルートに沿って銅鐸や銅劍等の青銅製文物が流通したことも分布状況から明らかとなっている。年ノ神遺跡はこの加古川本流と美義川の合流地点という、河川ルートを介した物流の要衝となる地に隣接しており、周辺には恐らく現在確認している遺跡以外に複数の弥生遺跡が点在していたと推測する。これらの集落は、集落共同体として有機的な関係を保持しながら、祭祀等についても執り行ったのではないかと考える。それは、両河川の合流地点を見下ろす位置にある正法寺山から中綱型銅劍が発見されたことを見ても、この地に武器形祭器としての銅劍の入手に介する首長権力の存在、または首長を中心とする集落共同体の存在が想定されるからである。そして、銅劍等の入手と共に、祭祀に関わるものとしての朱の入手にも触手をのばしたものと考えられる。年ノ神遺跡・大二遺跡は、このような共同体を担う集落の一つとして、主に朱の製造及び使用に関わった集落であったと考える。

また、朱の入手については、大和や阿波などの産出地を考える中で、把手付広片口鉢の分布などを考えると後者との交流が自然だが、出土遺物にはその地域のものは出土しておらず、入手過程で在地（播磨）の集落が介在していたとも考えられる。例えば、加古川下流域に立地する溝之口遺跡からは、朱の製造過程で使用したとされる「L」字形の石杵が出土しており、このような加古川流域の拠点集落が、他地域（主に瀬戸内地域）との流通ルートを掌握していたのではないかと考える。

## 2. 兵庫県下の新資料について

今回の資料整理を進めていく過程で、把手付広片口鉢のその形状から、これまで調査した弥生時代の遺跡の資料の中にも、あるものは気づかず、あるものは異形の遺物として報告した可能性もあると考え、既に報告された遺跡（兵庫県調査分）で、特に西播磨地域（主に龍野市周辺）について調べたところ、1点のみ確認できた。

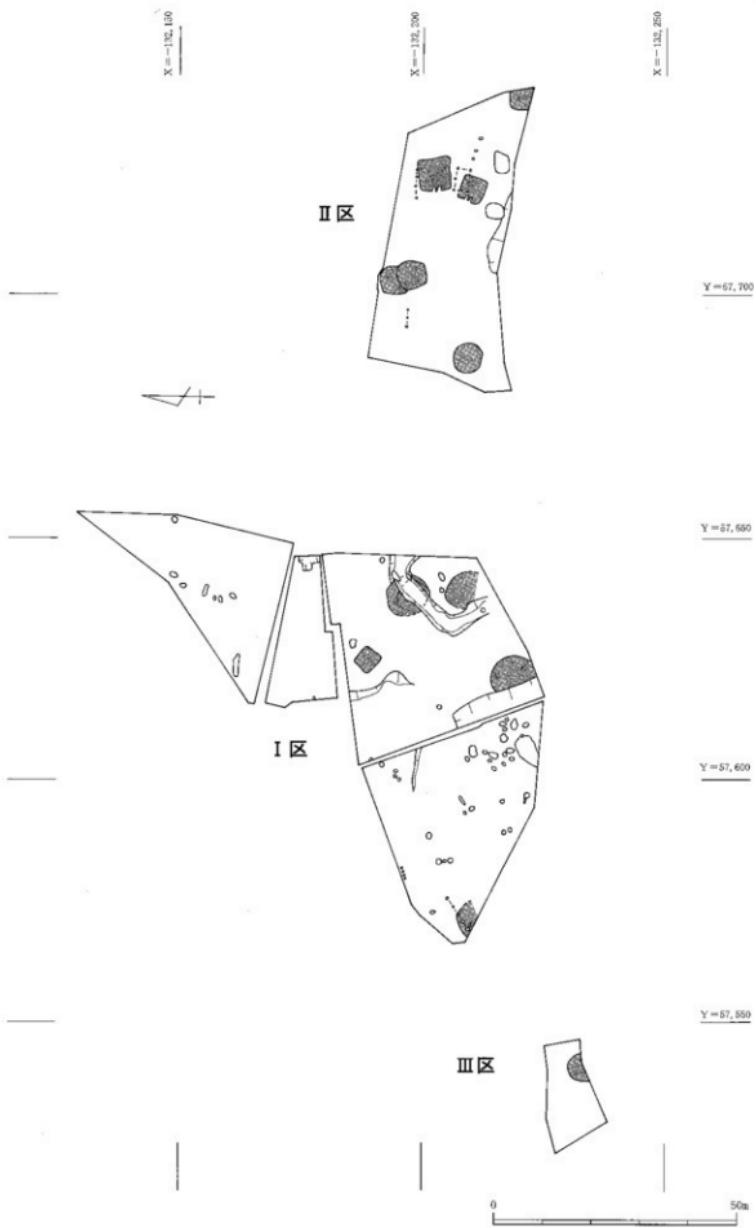
遺跡は龍子向イ山遺跡〔兵庫県文化財調査報告第51冊〕（龍野市）で、遺物は把手部のみが残存していた（遺物報告番号109）。報告では不明としながらも、把手の可能性を指摘している。

本資料は、遺跡の立地する東西に伸びる同一丘陵上の北東側に、養久山・前地遺跡（龍野市）が隣接する。養久山・前地遺跡では、豎穴住居から水銀朱の精製に関わる遺物として石製の臼が出土している。このことは、朱の製造及び使用に関わる遺跡として、双方の集落の意味づけを補完するばかりでなく、朱の製造そして使用といった一貫した工程を共同体内で行っていることが明らかになった。

### 参考文献

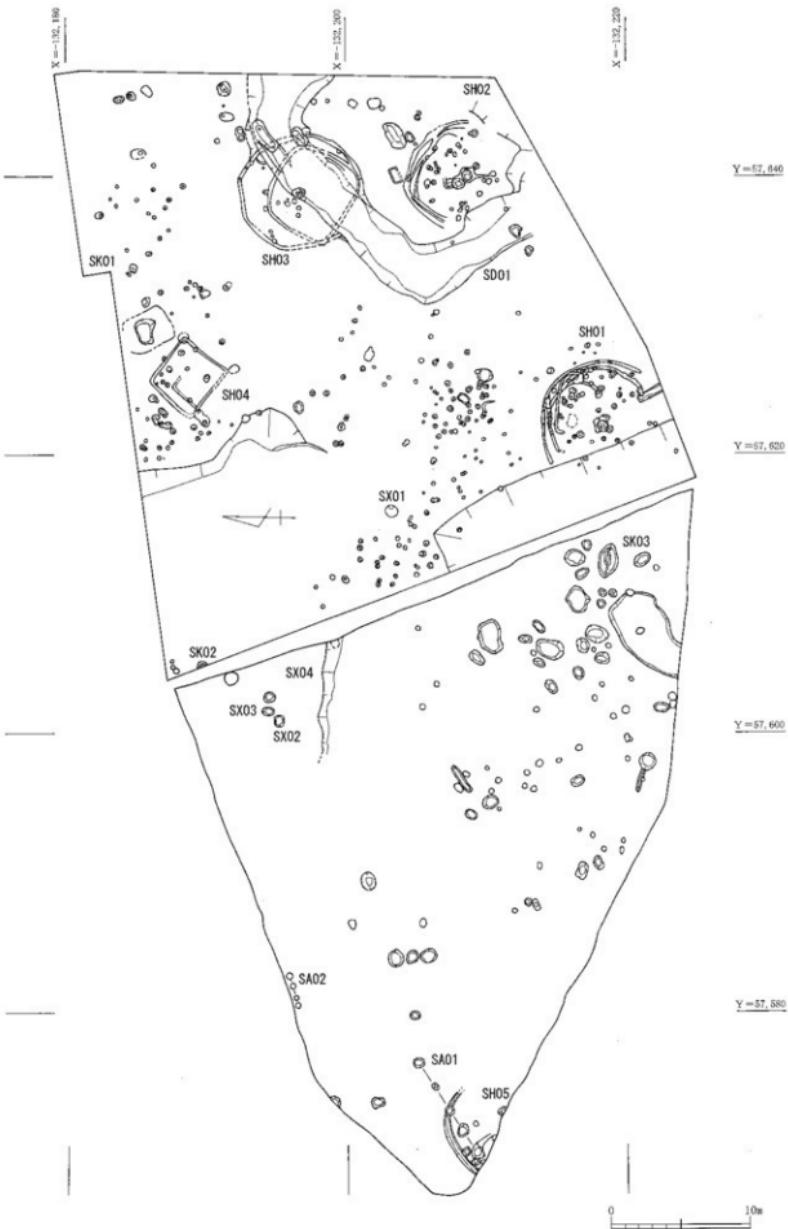
- 福岡県教育委員会「辻垣畠田・長通遺跡」椎田道路関係埋文化財調査報告第2集 1994年  
石野博信「古墳文化出現期の研究」 1985年  
香川県教育委員会他「上天神遺跡」高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告第6号 1995年  
兵庫県教育委員会「龍子向イ山遺跡」兵庫県文化財調査報告第51冊 1984年  
龍野市教育委員会「養久山・前地遺跡」龍野市文化財調査報告第15冊 1995年  
加古川市教育委員会「佛ノ道跡発掘調査報告書Ⅰ」加古川市文化財調査報告第10冊 1992年  
種庭淳介「加古川と由良川—モノの移動について—」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』  
横山浩一先生退官記念事業会 1989年

# 図 版

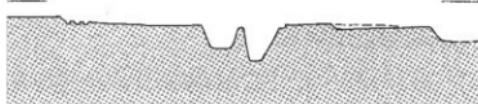
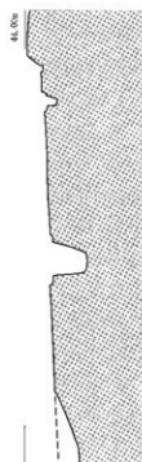
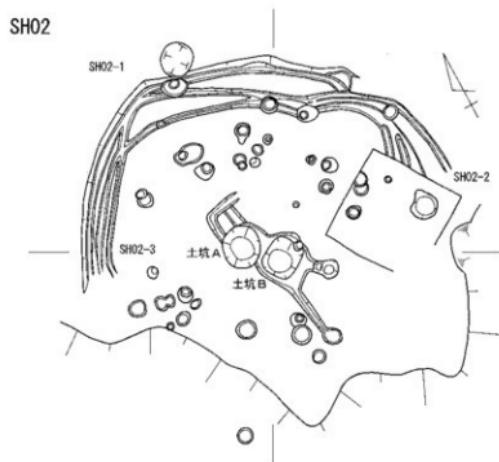
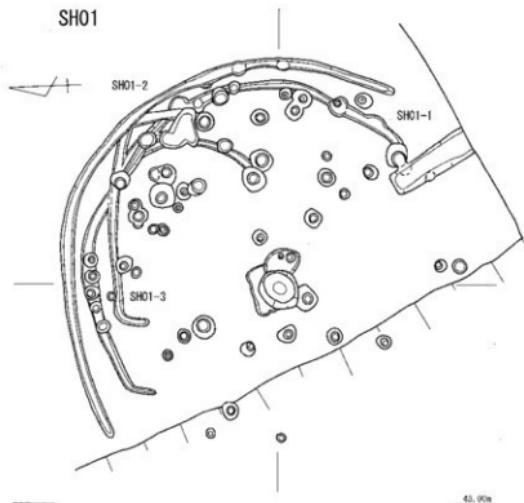


年ノ神遺跡全体図

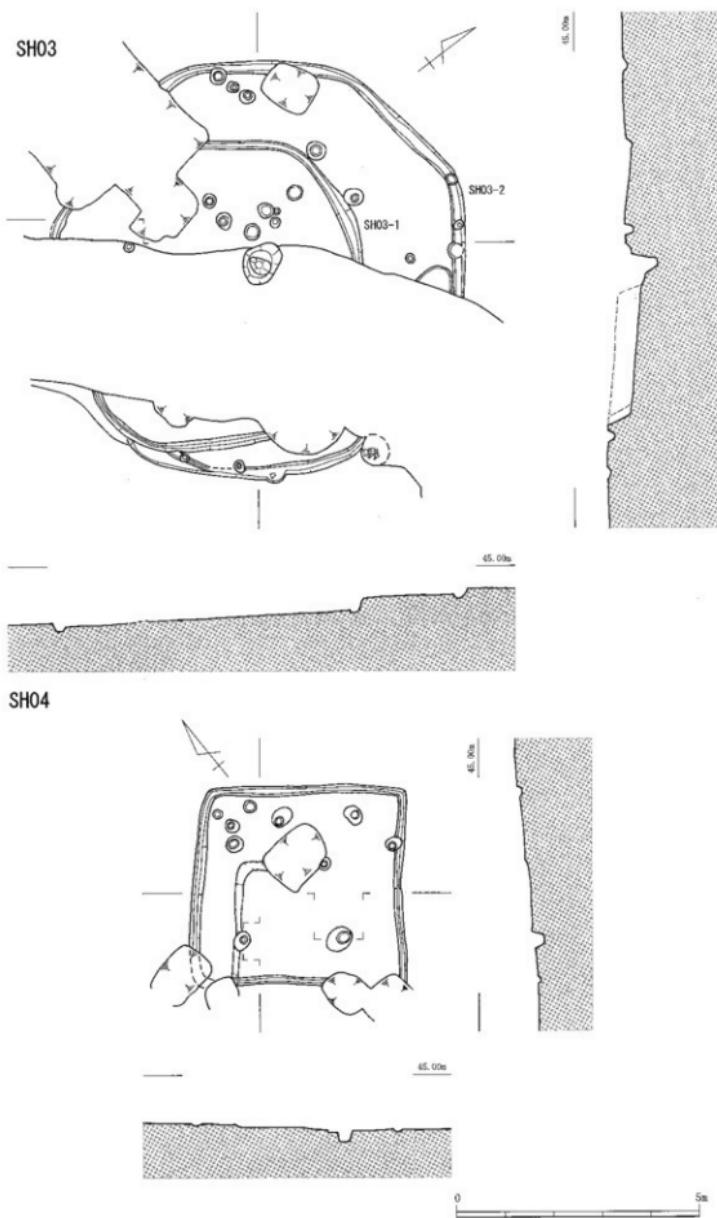
図版2 I区



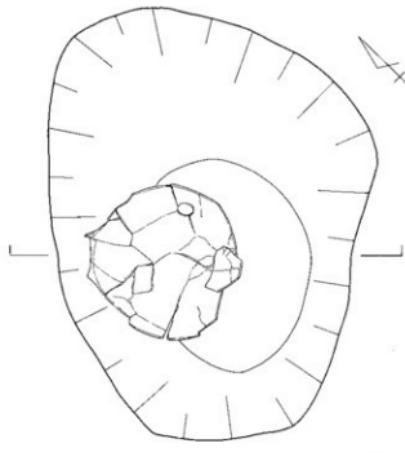
I区南部全体図



0 3a

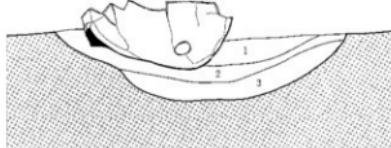


SX01

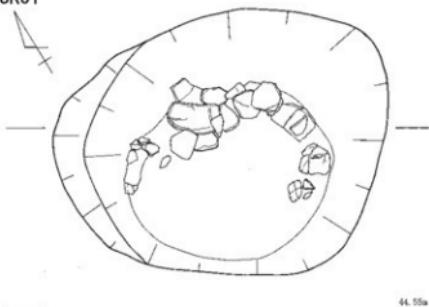


42.6m

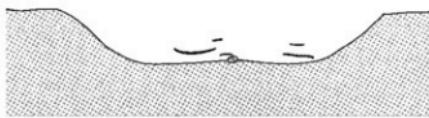
1. 明黄褐色 中砂（粗砂含む）  
2. 明茶褐色 都砂（中粗砂含む）  
3. 明茶褐色 中砂（粗砂含む）



SK01



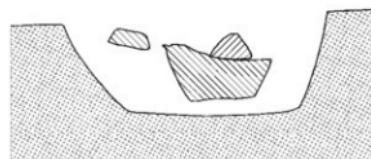
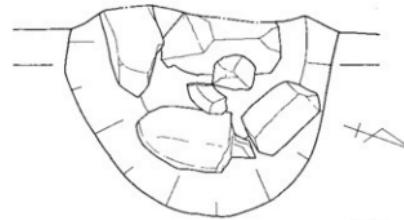
44.55m



0 50cm

図版6 I区

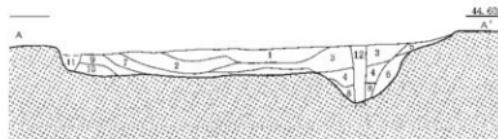
SK02



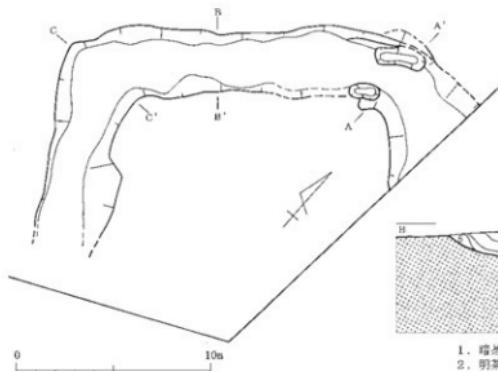
45.00m

50cm

SD01



44.50m

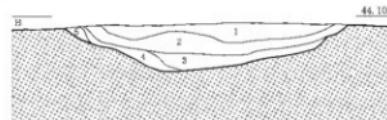


0

10m

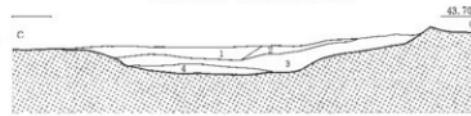
1. 明茶褐色 中粗砂（粗砂～極粗砂含む）
2. 明茶褐色 中砂（粗砂～極粗砂含む）
3. 暗茶褐色 中粗砂（粗砂～極粗砂含む）
4. 紫青褐色 粗砂～極粗砂

1. 暗茶褐色 中粗砂
2. 暗茶褐色 中砂（粗砂～極粗砂含む）
3. 暗茶褐色 細砂～中砂（粗砂～極粗砂含む）
4. 暗茶褐色 細砂（中砂～粗砂含む）
5. 紫青褐色 細砂（粗砂～極粗砂含む）
6. 暗茶褐色 細砂（粗砂含む）
7. 暗茶褐色 細砂～中砂（粗砂～極粗砂含む）
8. 暗茶褐色 シルト混中砂（粗砂含む）
9. 暗茶褐色 細砂（粗砂～極粗砂含む）
10. 暗茶褐色 細砂（粗砂～極粗砂含む）
11. 暗茶褐色 細砂～中砂（粗砂含む）
12. 暗茶褐色 細砂～中砂（粗砂含む）



44.10m

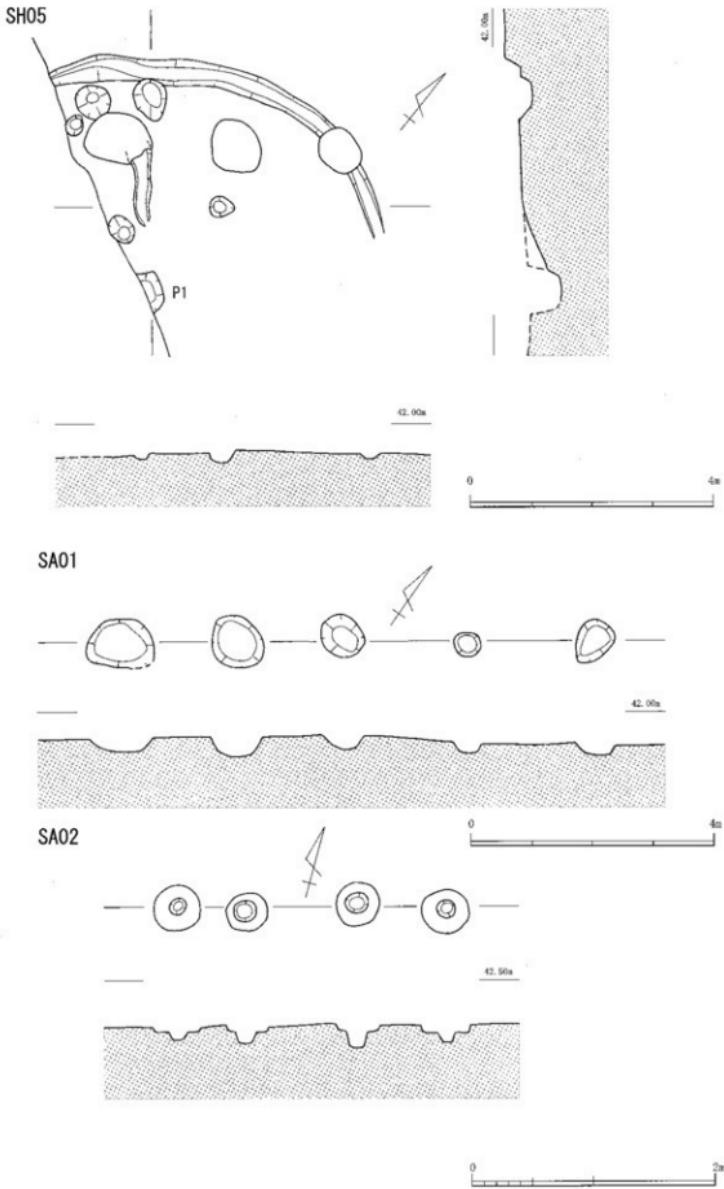
1. 暗茶褐色 中粗砂
2. 明茶褐色 中砂（粗砂含む）
3. 暗茶褐色 中粗砂（粗砂含む）
4. 紫黃褐色 細～中砂（粗砂含む）
5. 暗茶褐色 中粗砂（粗砂含む）



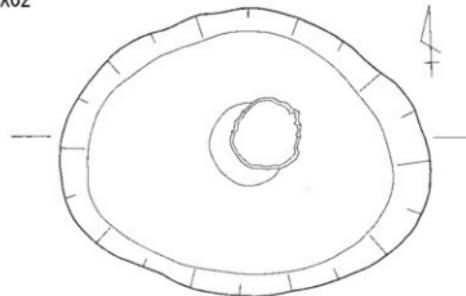
43.70m

C 2m

0



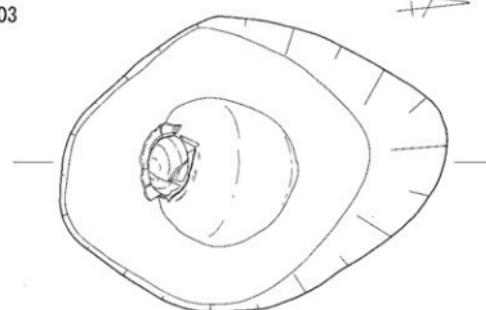
SX02



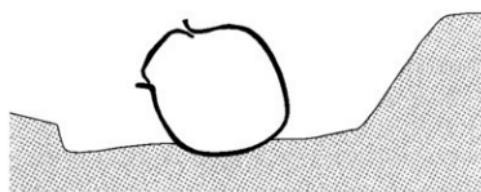
43.10m



SX03

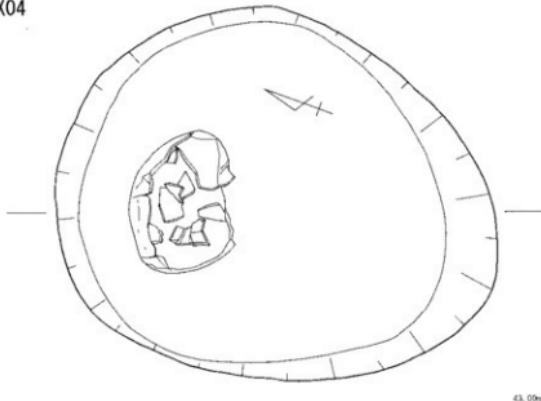


43.20m



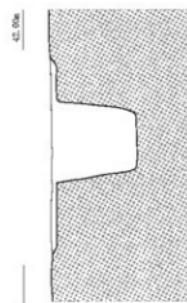
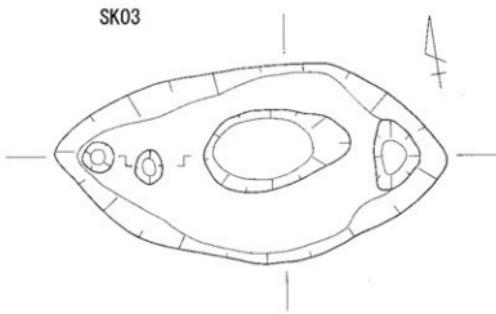
0 50cm

SX04

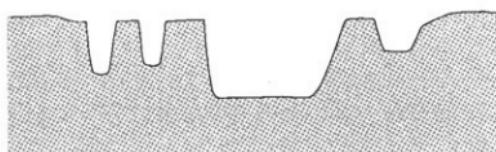


0 50cm

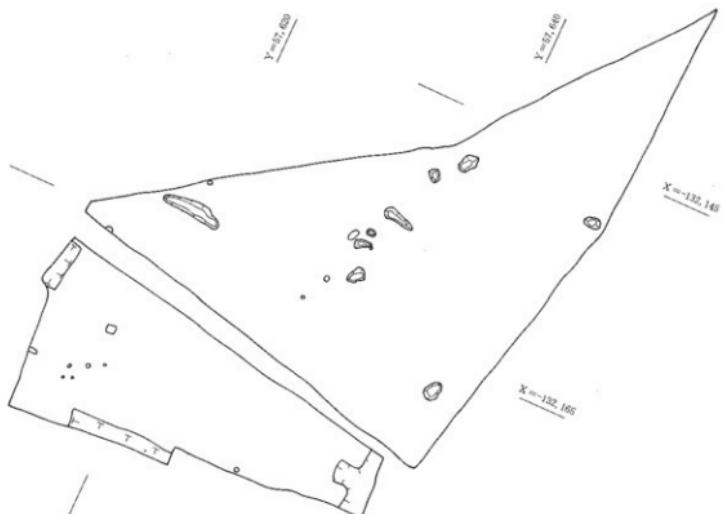
SK03



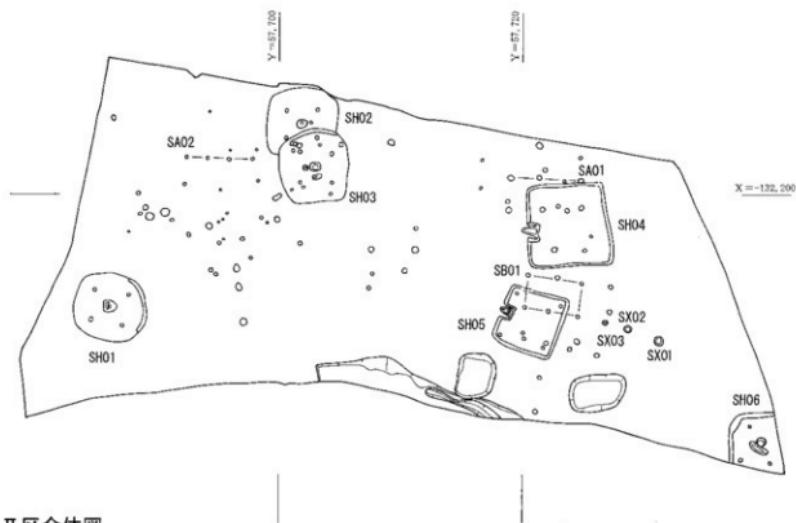
42.90m



0 1m

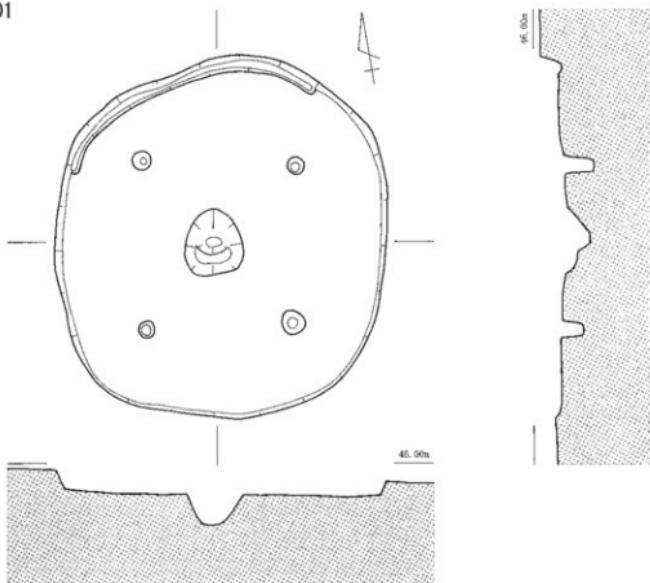


I区北半部  
全体図

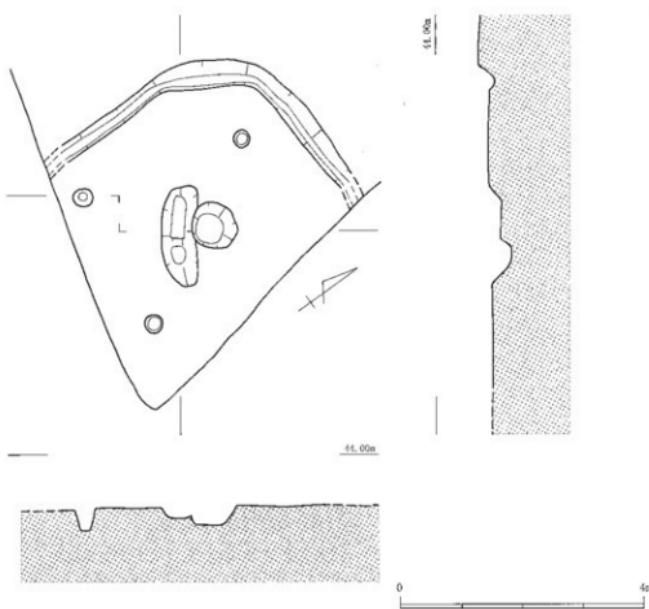


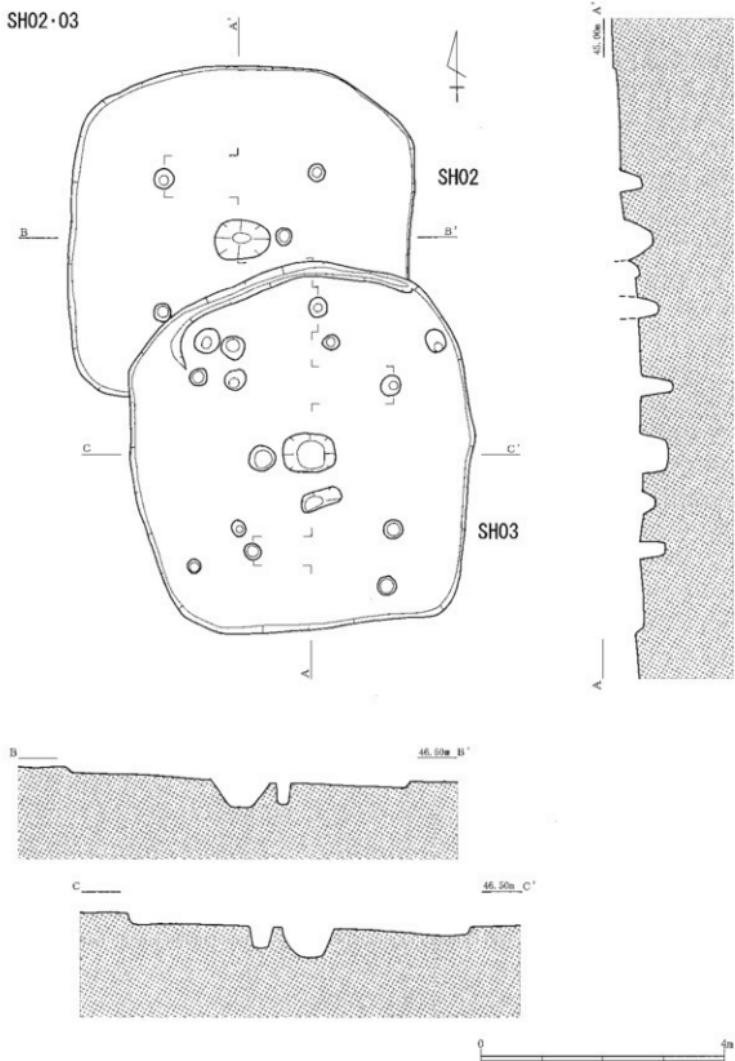
II区全体図

SH01



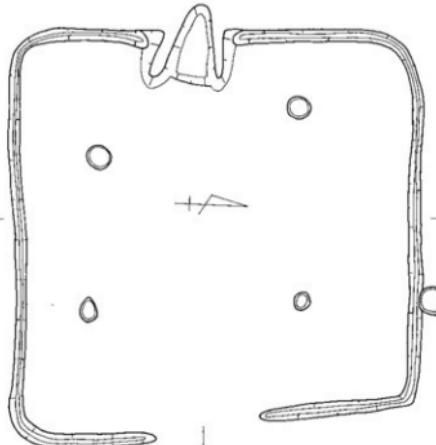
SH06







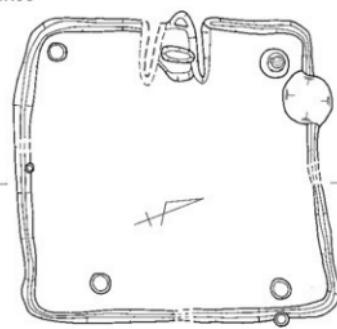
SH04



44.00m



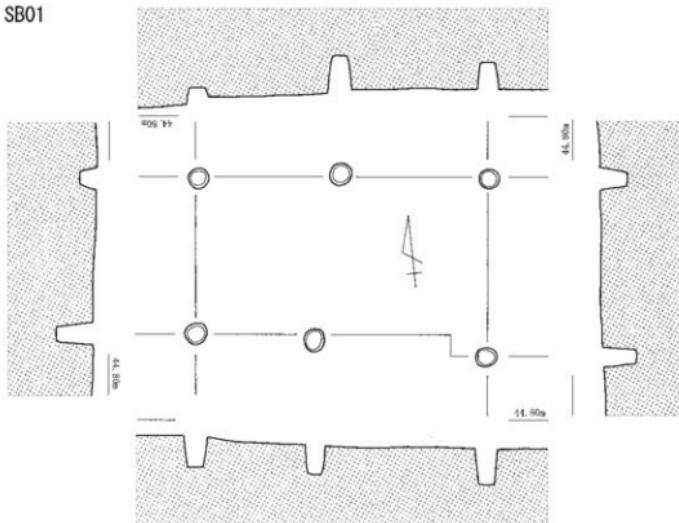
SH05



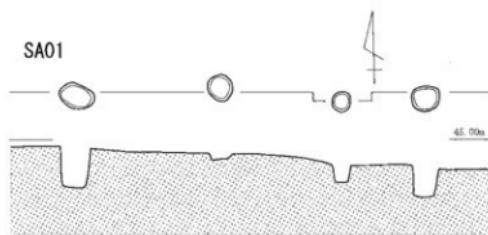
45.00m



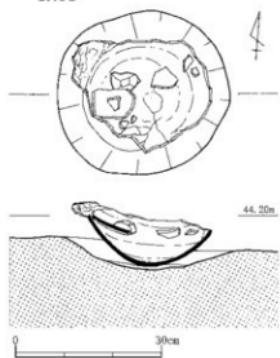
SB01



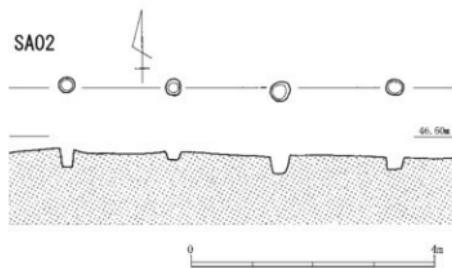
SA01



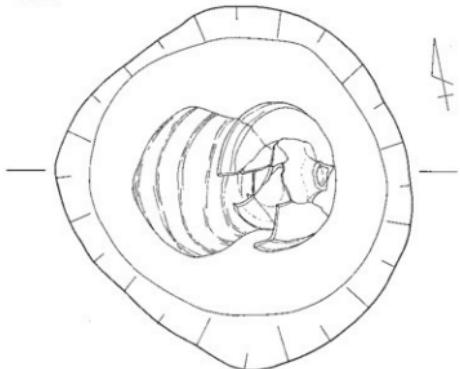
SX03



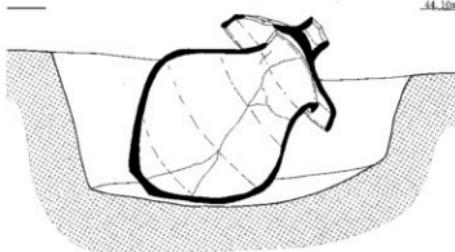
SA02



SX01

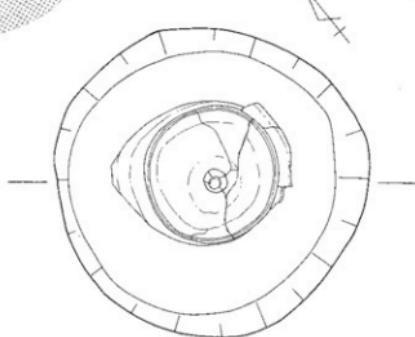


44.10a



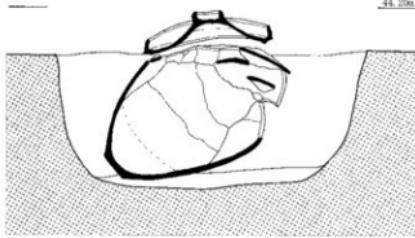
44.10a

SX02



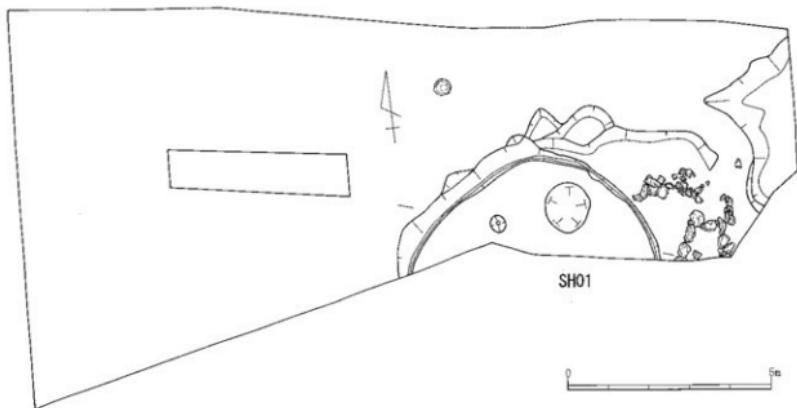
—

44.10a

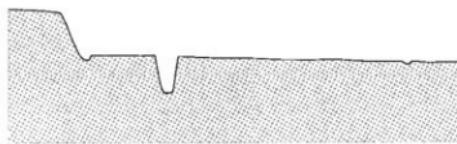
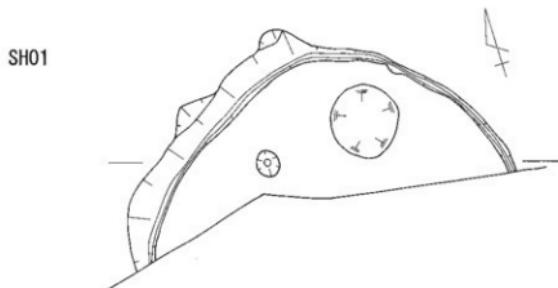


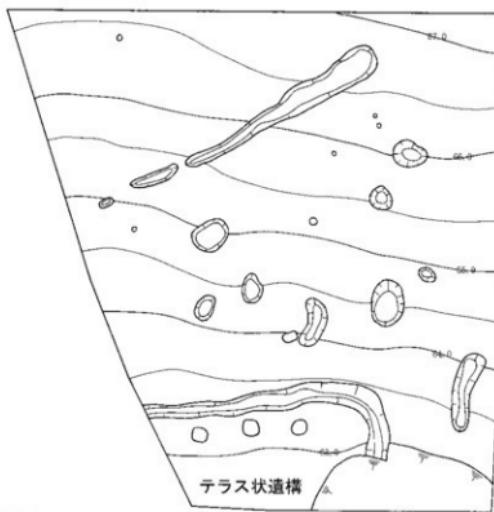
0

50cm

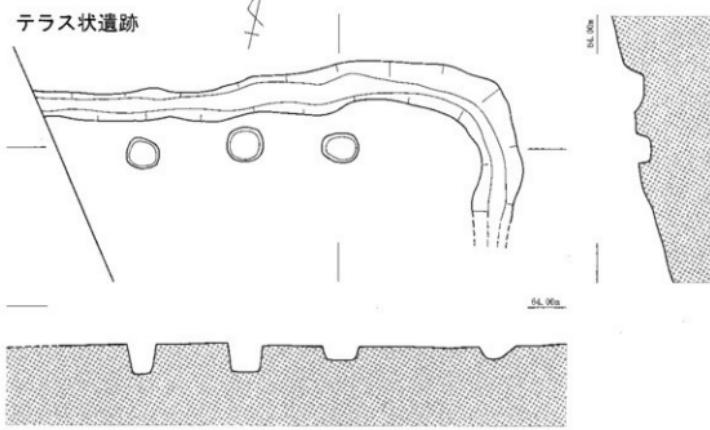


III区全体図

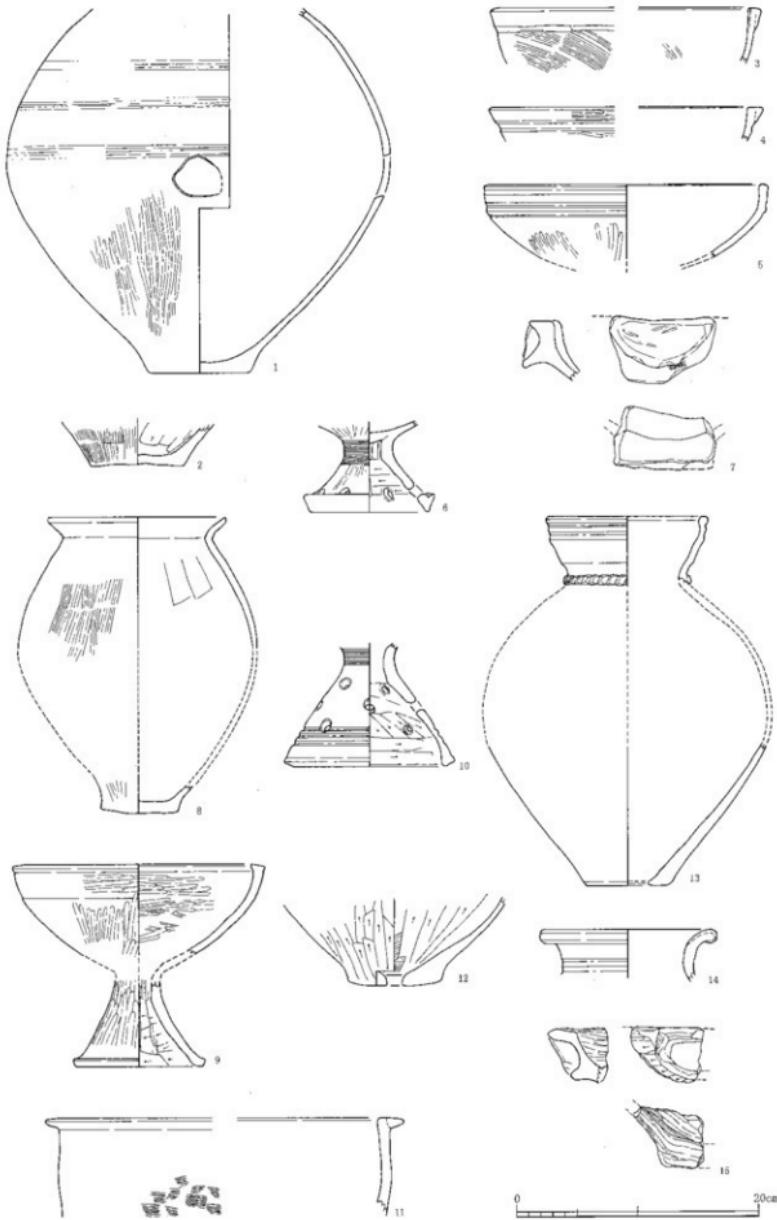




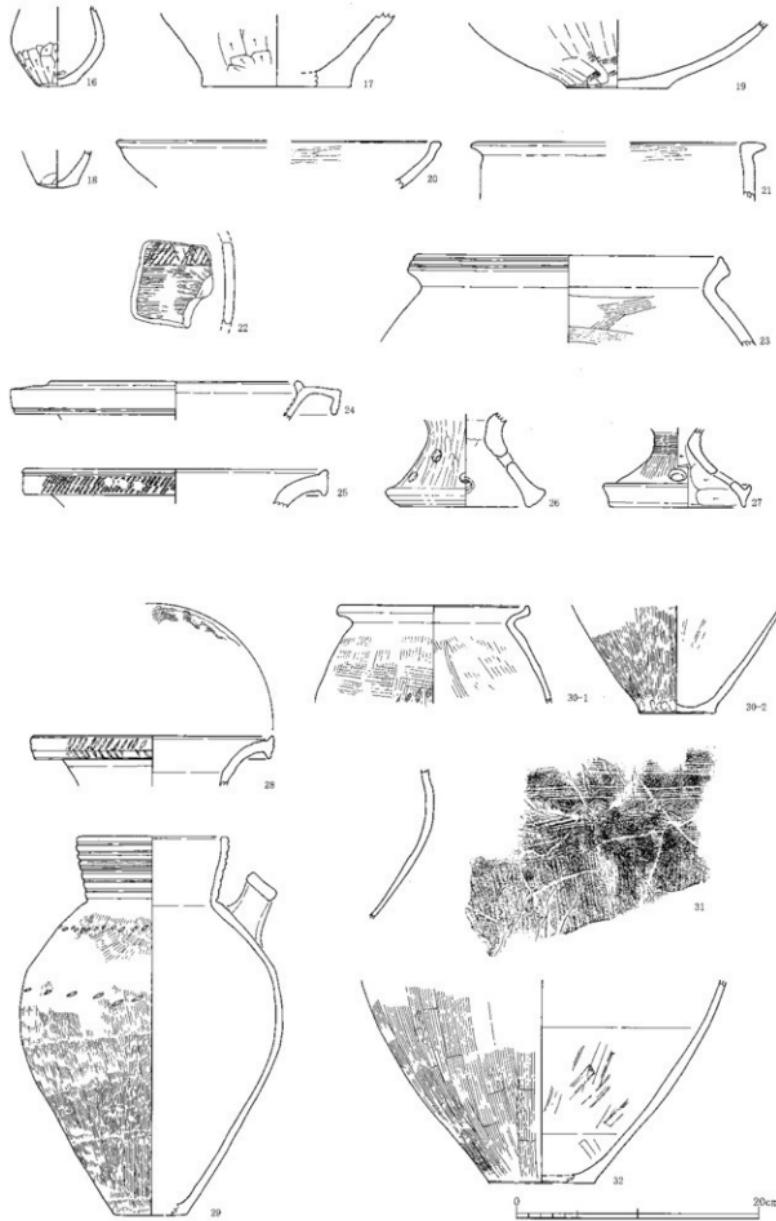
IV区全体図



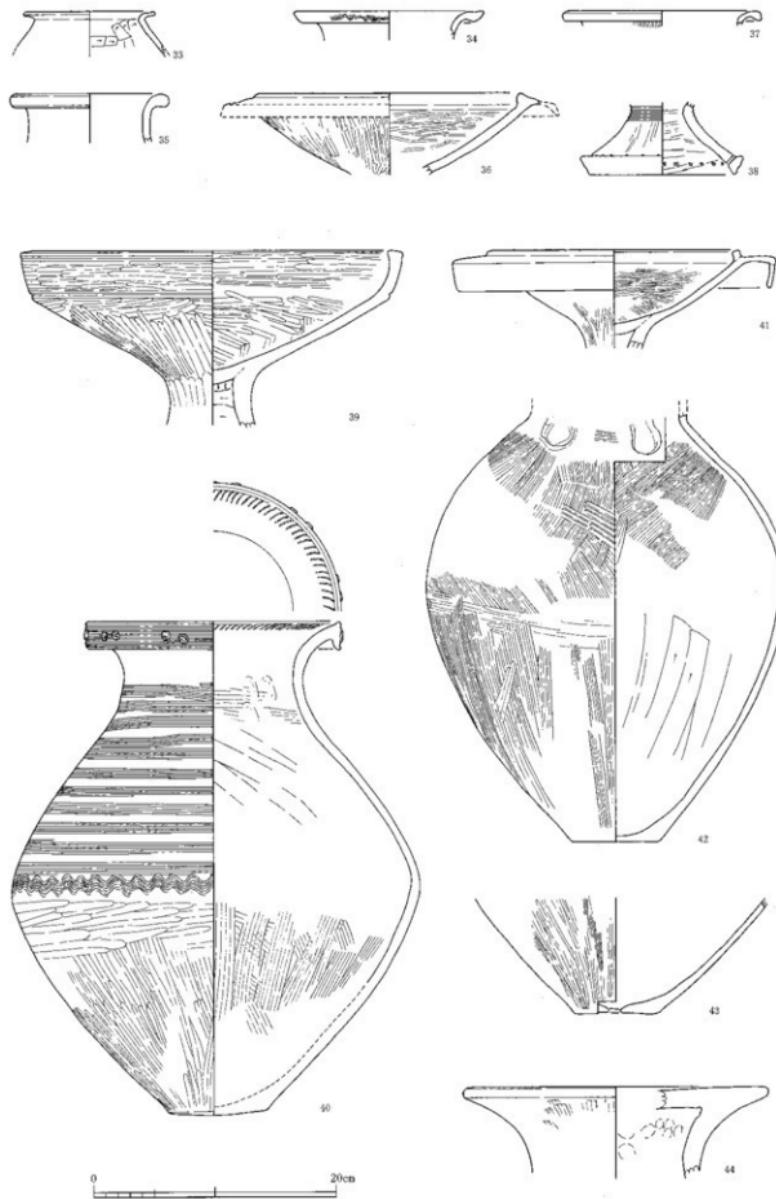
0 5m



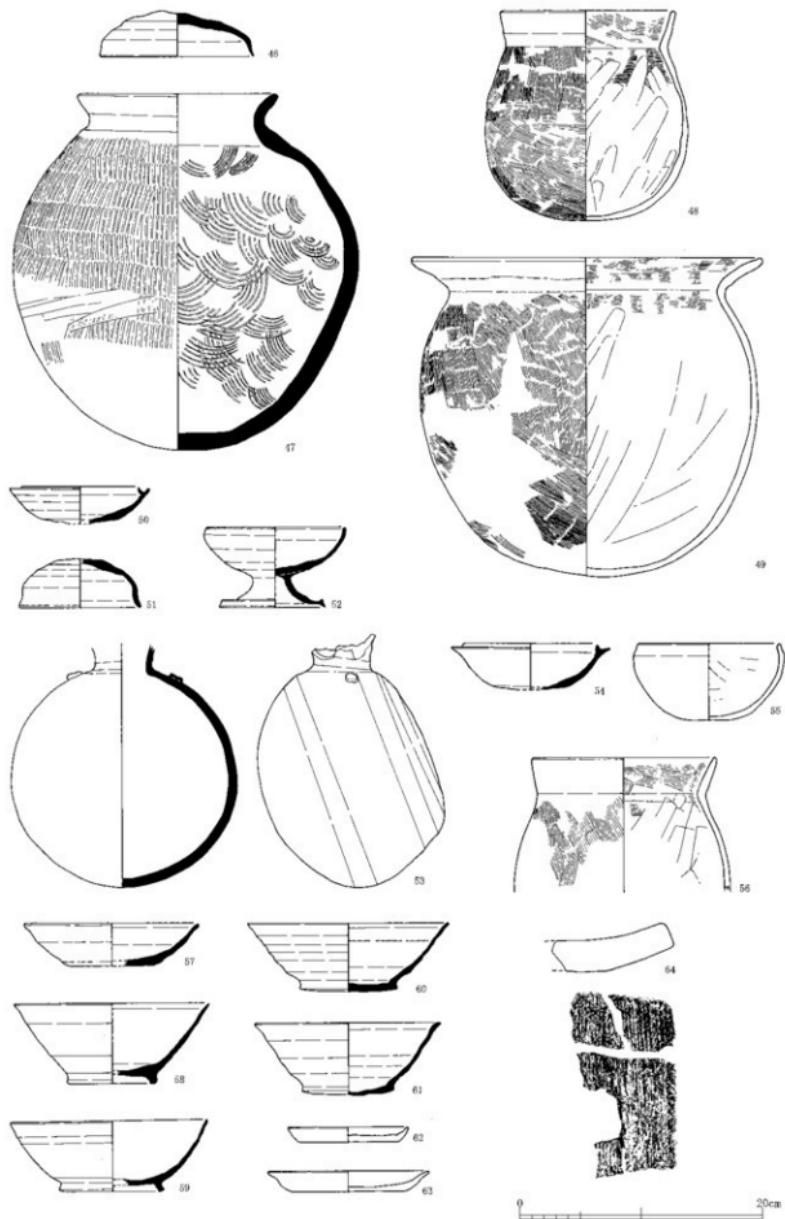
年ノ神遺跡出土土器(1)



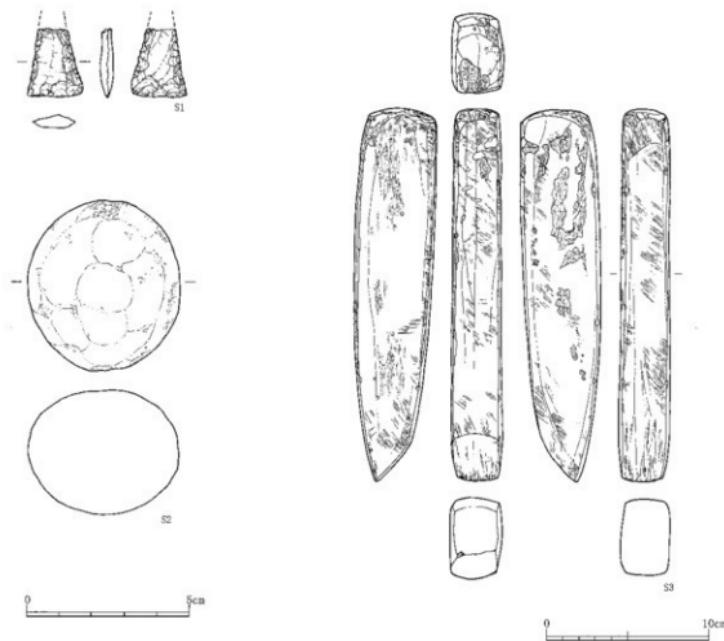
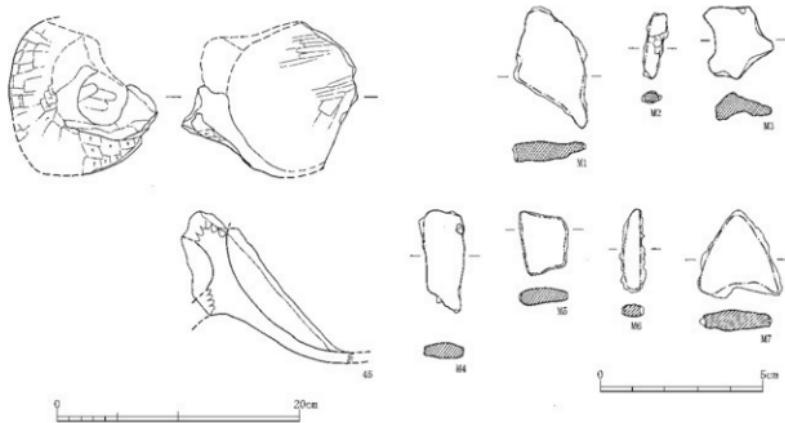
## 年ノ神遺跡出土土器(2)



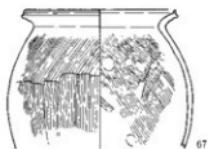
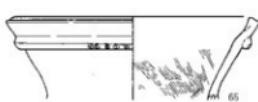
年ノ神遺跡出土土器(3)



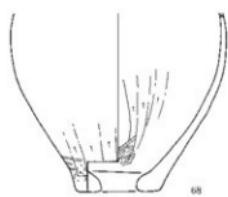
年ノ神遺跡出土土器(4)



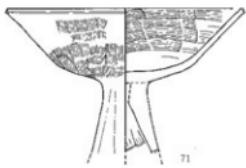
年ノ神遺跡出土土器・鉄器・石器



69



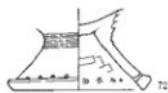
70



73



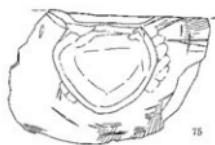
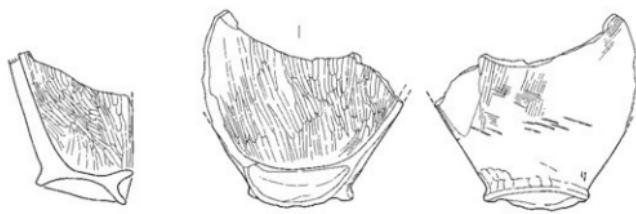
74



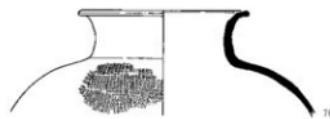
72



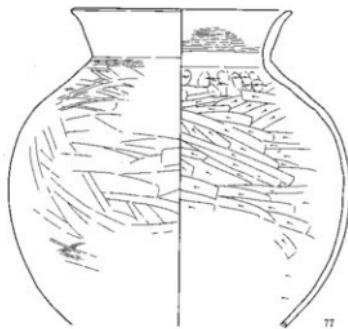
大二遺跡出土土器(1)



75



76



77



大二遺跡出土土器(2)

# 写 真 図 版



遠 景(1)

左端の河川は美齋川

奥の河川は加古川

(東から)



遠 景(2)

(東から)



遠 景(3)

(南から)



東半部全景(1)  
(垂直写真)



東半部全景(2)  
(北西から)



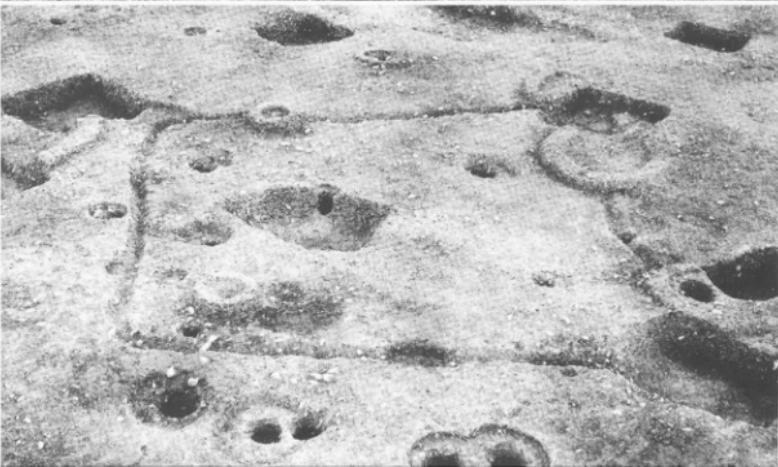
SH01  
(西から)



SH02  
(西から)



SH03  
(西から)



SH04  
(北から)



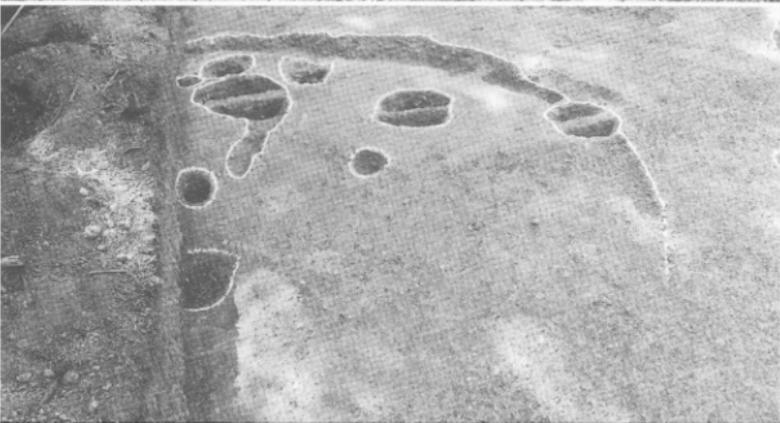
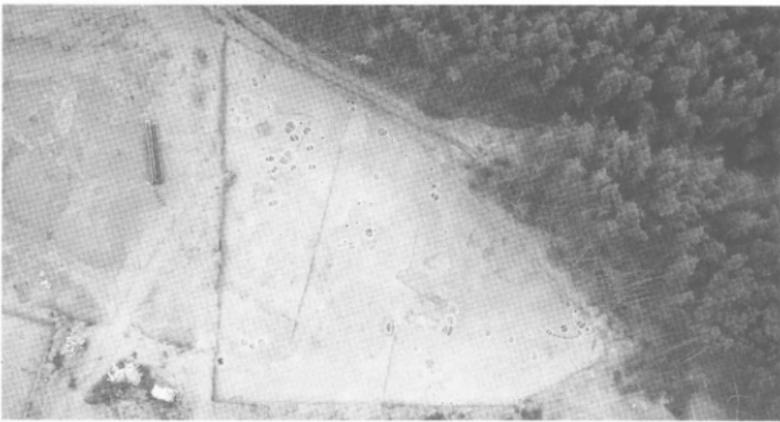
左)SX01  
(南から)  
右)SK01  
(南から)

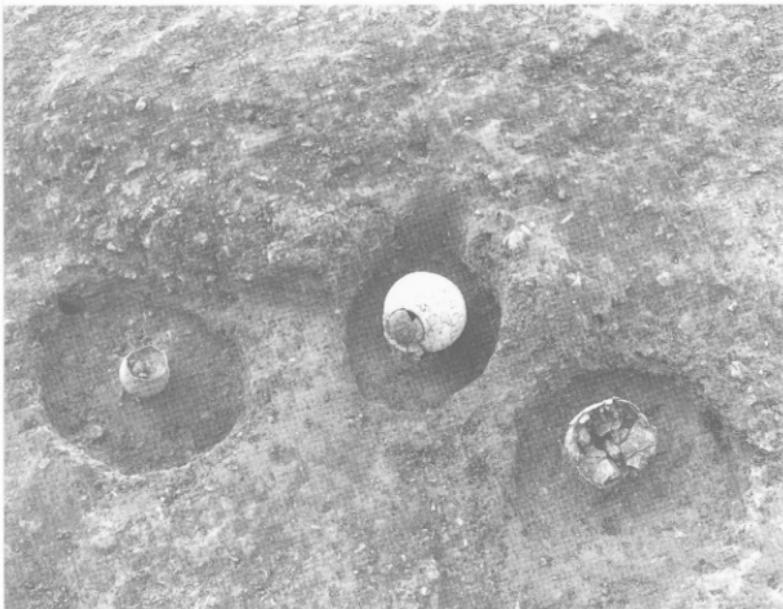


SK02  
(東から)

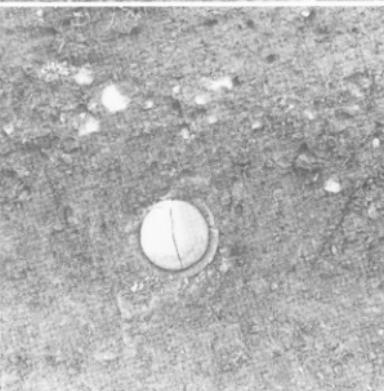
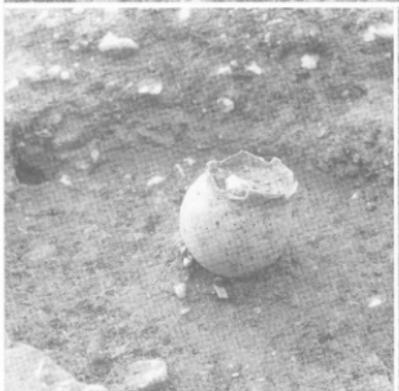


SD01  
(北から)

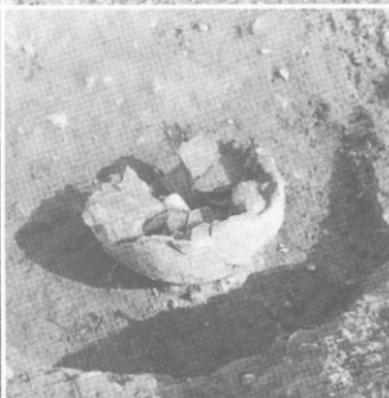
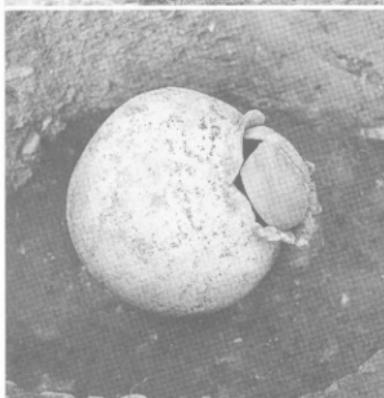




埋設土器群  
左からSX02・03・04  
(南から)



左)SX02  
(南から)  
右)SX03検出状況  
(南から)



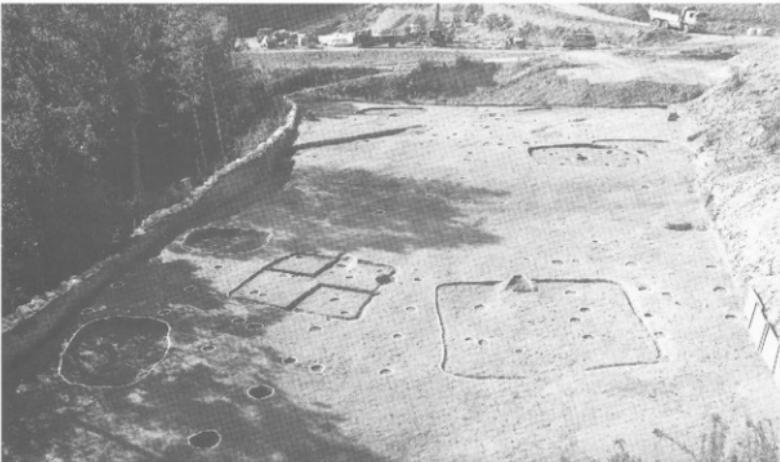
左)SX03  
(西から)  
右)SX04  
(東から)



全 景(1)  
(垂直写真)



全 景(2)  
(西から)



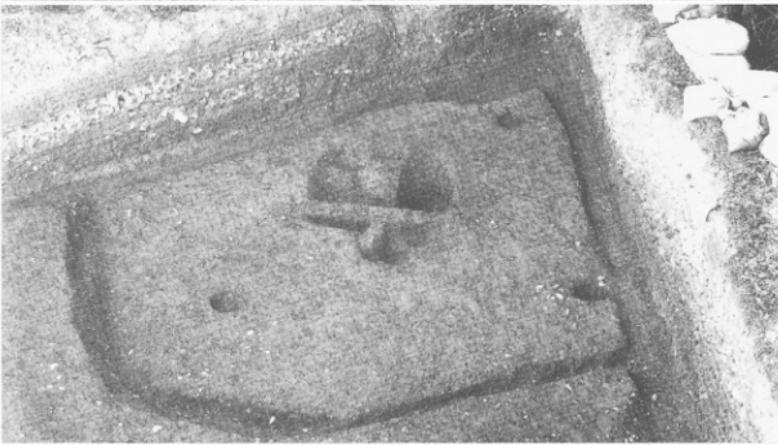
全 景(3)  
(東から)



SH01  
(南から)



SH02・03  
(南から)



SH06  
(北西から)



SH04  
(東から)



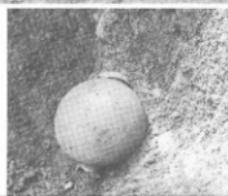
SH05  
(東から)



左) SH04カマド  
(東から)  
右) SH05カマド  
(東から)

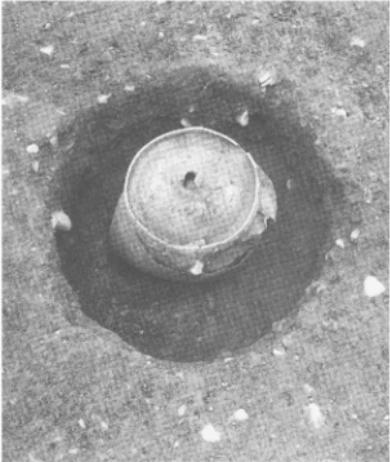
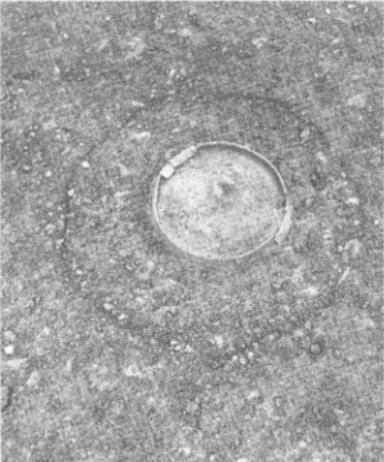


SH05柱穴内  
土器出土状況  
(東から)





左)SX01検出状況  
(東から)  
右)SX01  
(北から)



左)SX02検出状況  
(西から)  
右)SX02  
(南から)



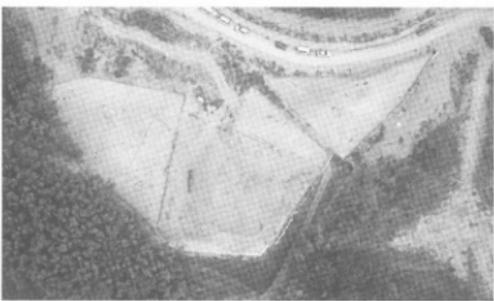
SX03  
(東から)

左) I区北半部全景(1)

(垂直写真)

右) IV区全景(1)

(垂直写真)



I区北半部全景(2)

(北から)



IV区全景(2)

(南から)





III区  
全 景  
(西から)



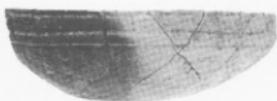
SH01  
(北から)



大二遺跡  
全 景  
(垂直写真)



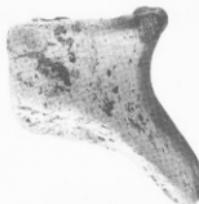
1



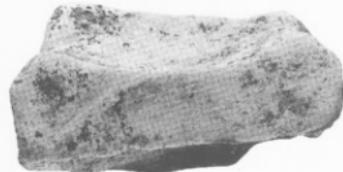
5



6



—



7

出土弥生土器



9



14



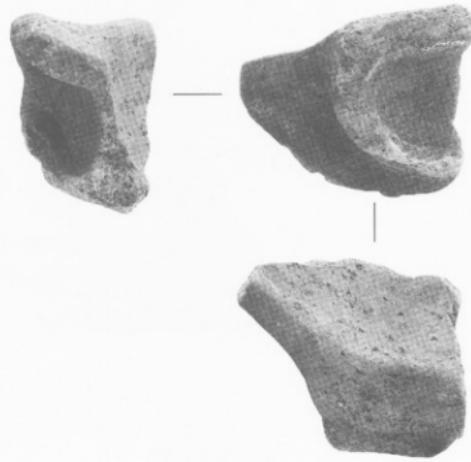
16



12



24



15

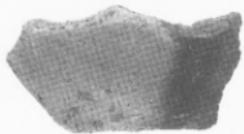
出土弥生土器



2



3



17



4

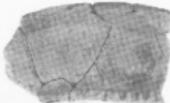


18

堅穴住居出土弥生土器



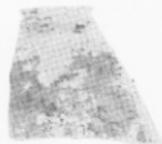
8



13



10



11

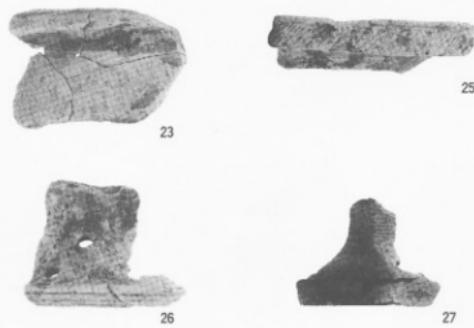


13

土坑出土弥生土器



SD01出土弥生土器

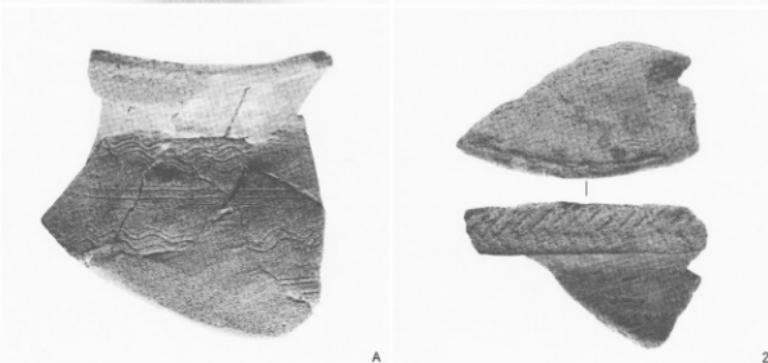


包含層出土弥生土器



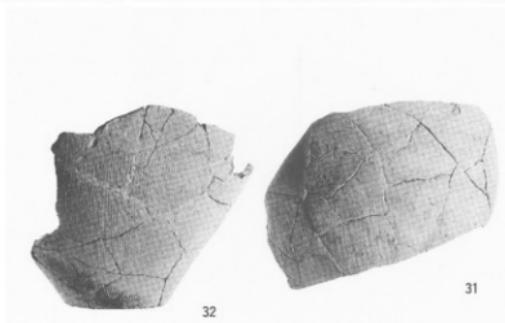
29

30



A

28



32

31

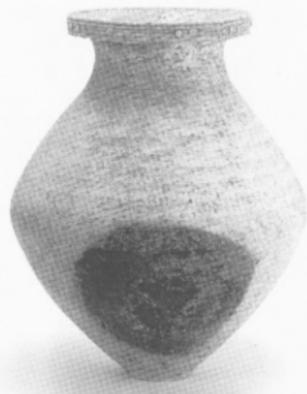
年ノ神古墳群出土弥生土器



39



41



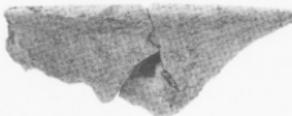
40



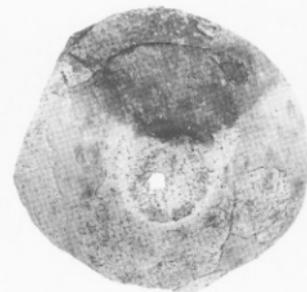
42



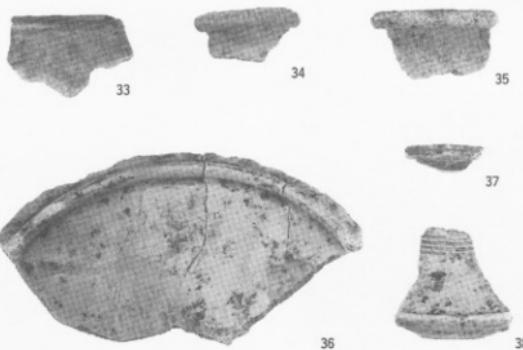
43



44



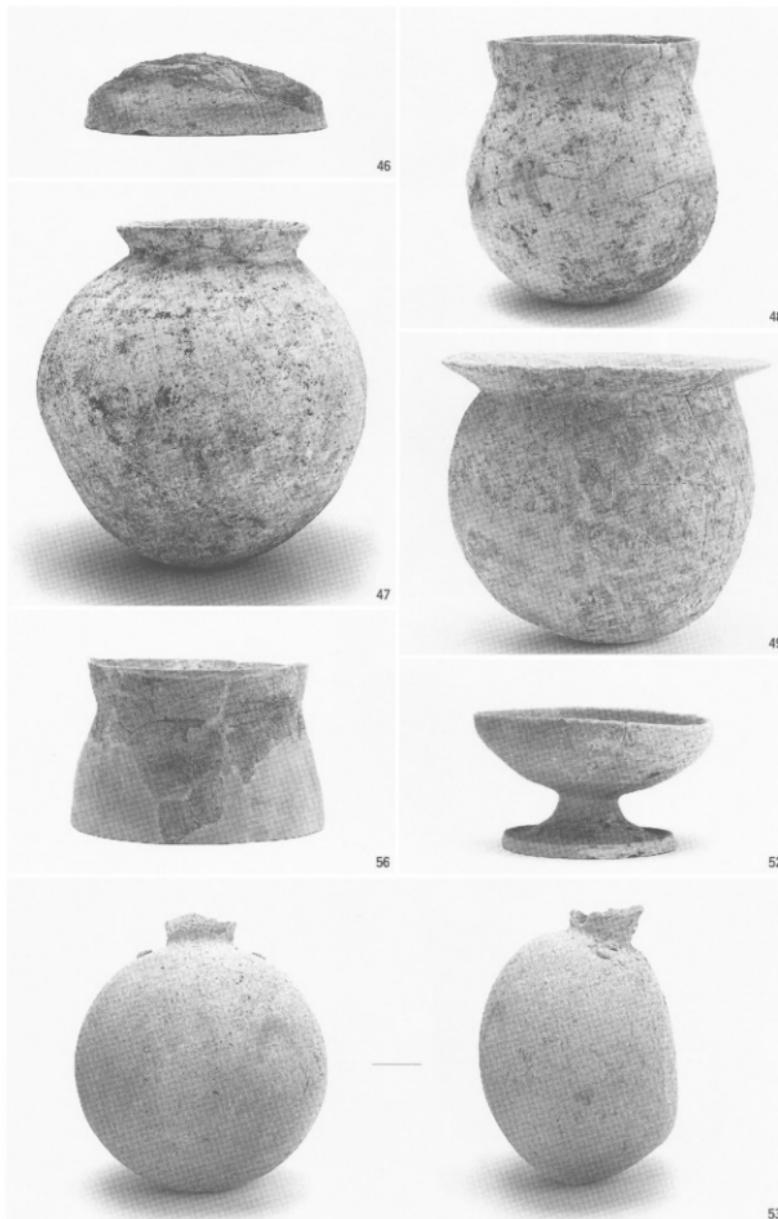
出土弥生土器



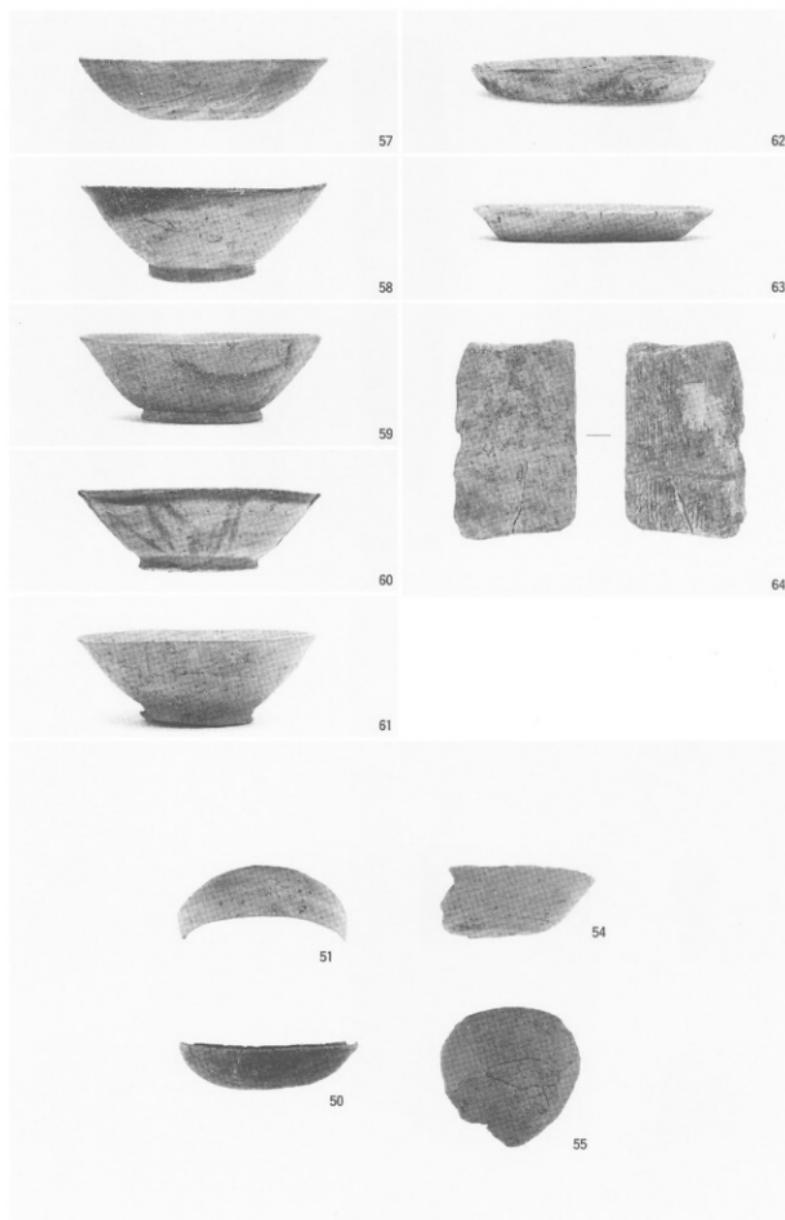
堅穴住居出土弥生土器



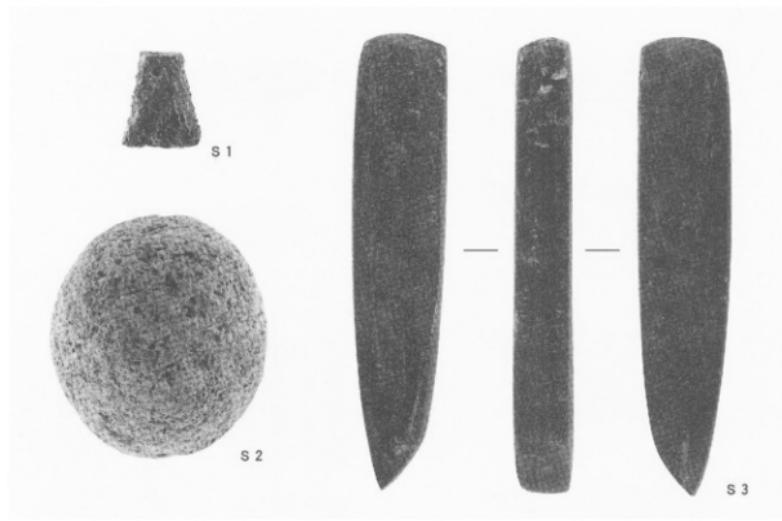
包含層出土弥生土器



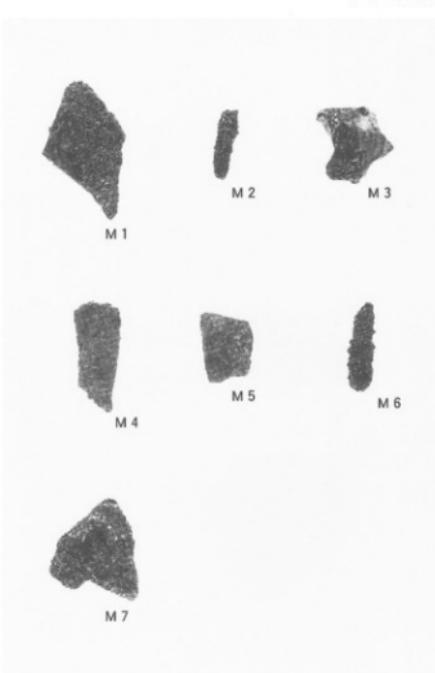
出土須恵・土師器(1)



出土須恵器・土師器(2)



出土石器



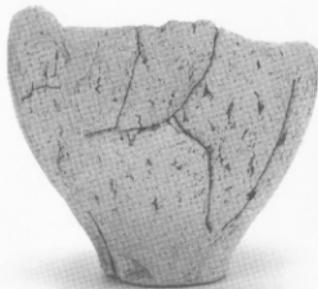
出土鉄器



67



70



71

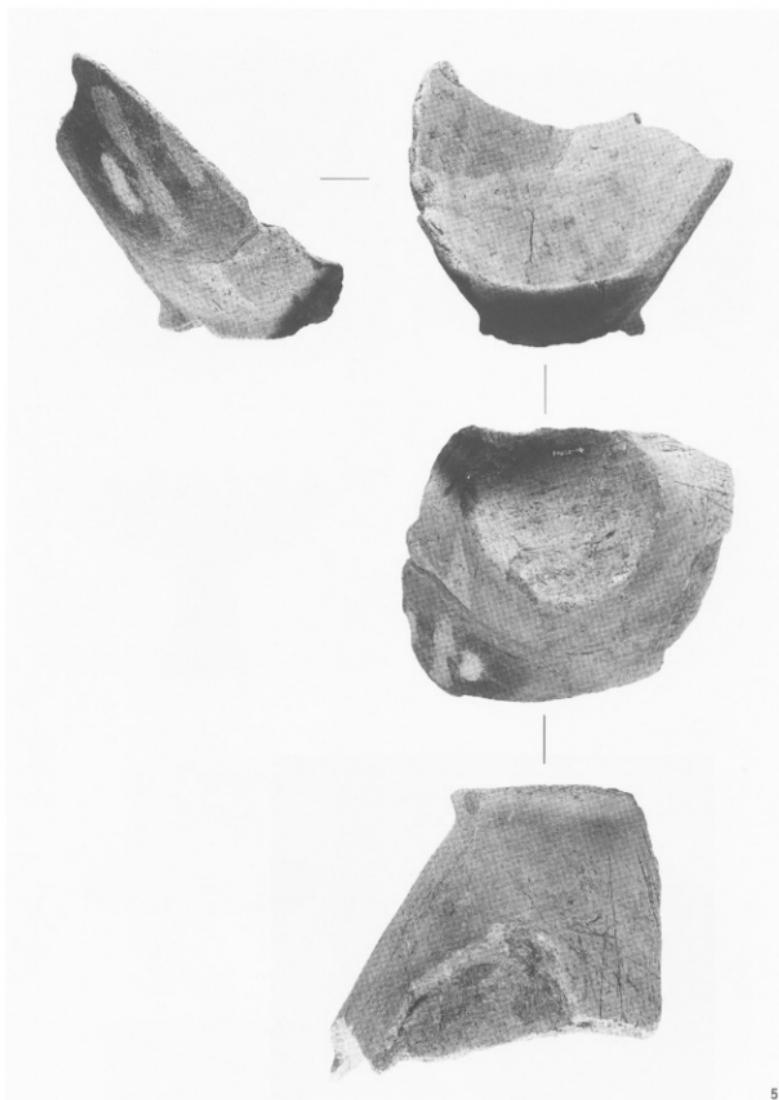


68



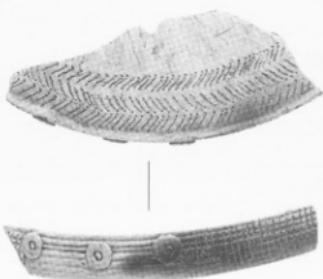
73

出土弥生土器



5

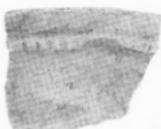
出土弥生土器(2)



66



77



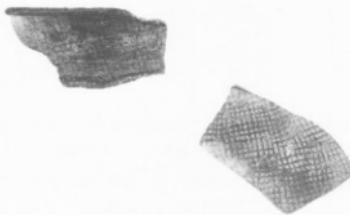
65



69



74



76

出土弥生土器・土師器等

## 報告書抄録

ふりがな	としかみいせき							
書名	年ノ神遺跡							
副書名	山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次	XXXVII							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第235冊							
編著者名	長濱誠司・森内秀造・種定淳介・平田博幸・深江英憲							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号							
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
としかみ 年ノ神遺跡	兵庫県 三木市 鳥町 字年ノ神	28201	930117	34度 48分 26秒	134度 57分 45秒	1993.10.05 1994.03.25 1994.07.05 1995.01.07	1337m <sup>2</sup> 3358m <sup>2</sup>	山陽自動車道 建設事業に伴 う調査
おおふた 大二遺跡	兵庫県 三木市 鳥町 字大二		940224				474m <sup>2</sup>	
940242	34度 48分 18秒	134度 57分 57秒	1994.11.16 12.21					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
年ノ神遺跡	集落	弥生時代中期 古墳時代後期	住居跡・埋設土器・土坑 住居跡・埋設土器	弥生土器・石器 ・鉄器 須恵器・土師器		把手付広片口鉢が出土		
大二遺跡	流路	弥生時代中期 古墳時代	弥生土器 須恵器・土師器・韓式 系土器			把手付広片口鉢が出土		

---

兵庫県文化財調査報告 第235冊

## 年ノ神遺跡

－山陽自動車建設に伴う埋蔵文化財調査報告XXXVII－

平成14年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

T E L 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 菊三印刷株式会社

〒652-0803 神戸市兵庫区大開通2丁目2-11

---